

山部宿禰赤人が歌一首

一四二 百濟野の萩の古枝に春待つと來居し鶯鳴きにけむかも

大伴坂上郎女が柳の歌二首

一四三 吾が背子が見らむ佐保路の青柳を手折りてだにも見むよしもがも

一四三 打上ぐる佐保の河原の青柳は今は春べと成りにけるかも

大伴宿禰三依が梅の歌一首

一四四 霜雪も未だ過ぎねば思はぬに春日の里に梅の花見つ

厚見玉の歌一首

一四五 河蝦鳴く甘南備川に陰見えて今や咲くらむ山吹の花

大伴宿禰村上が梅の歌二首

一四六 含めりと言ひし梅が枝今朝降りし沫雪に遇ひて咲きぬらむかも

一四七 霞立つ春日の里の梅の花嵐の風に散りこすな努

大伴宿禰駿河麻呂が歌一首

一四八 霞立つ春日の里の梅の花花に問はむと吾が思はなくに

中臣朝臣武良自が歌一首

一四九 時は今は春に成りぬとみ雪降る遠き山邊に霞棚引く

河邊朝臣東人が歌一首

一四〇 春雨の重々降るに高圓の山の櫻は如何にあるらむ

大伴宿禰家持が鶯の歌一首

一四一 打霧らし雪は降りつゝ乍然に吾家の園に鶯鳴くも

大藏少輔丹比屋主眞人が歌一首

一四二 難波邊に人の行ければ後れ居て春菜摘む兒を見るが悲しさ

丹比眞人乙麻呂が歌一首

一四三 霞立つ野の上の方に行きしかば鶯鳴きつ春になるらし

高田女王の歌一首

一四四 山吹の咲きたる野邊の壺堇此の春の雨に盛なりけり

大伴坂上郎女が歌一首

一四五 風交り雪は降るとも實にならぬ吾家の梅を花に散らすな

大伴宿禰家持が春雉の歌一首

一四六 春の野に求食る雉の妻戀ひに己が邊を人に知れつゝ

大伴坂上郎女が歌一首
尋常に聞くは苦しき喚子鳥聲懐しき時には成りぬ

右の一首は天平四年三月一日佐保の宅の作、

春相聞

大伴宿禰家持が坂上家の大嬢に贈れる歌一首

一四八 吾が宿に蒔きし翟麥何時しかも花に咲きなむ比へつゝ見む

大伴田村家の大嬢が妹坂上の大嬢に與れる歌一首

一四九 茅花抜く淺茅が原の壺堇今盛なり吾が戀ふらくは

大伴宿禰家持が坂上郎女に贈れる歌一首

一五〇 心深き物にぞありける春霞棚引く時に戀の繁きは

笠女郎が大伴家持に贈れる歌一首

一五一 水鳥の鴨の羽の色の春山の覺束なくも思ほゆるかも

紀女郎が歌一首

一五二 闇ならば宜も來座さじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや

天平五年癸酉春閏三月、笠朝臣金村が入唐使に贈れる歌一首并短歌

一五三 玉手次懸けぬ時なく、氣の緒に吾が思ふ君は、虚蟬の世の人なれば、大君の命恐み、夕さ

れば鶴が妻喚ぶ、難波潟三津の埼より、大船に眞楫繁貫き、白浪の高き荒海を、島傳ひい

別れ行かば、留れる吾は幣帛取り、齋ひつゝ君をば待たむ、早還りませ

反歌

一五四 波の上よ見ゆる小島の雲隠り嗚呼氣衝かし相別れなば

一四五 玉切命に向ひ戀ひむよは君が御船の梶柄にもが

藤原朝臣廣嗣が櫻花を娘子に贈れる歌一首

一四六 此花の一瓣の内に百種の言ぞ隠れるおほろかにすな

娘子が和ふる歌一首

一四七 此花の一瓣の内は百種の言持ちかねて折らえけらすや

厚見王の久米女郎に贈り給へる歌一首

一四八 宿にある櫻の花は今もかも松風疾み地に散るらむ

久米女郎が報贈へ奉れる歌一首

一四九 世の中も常にしあらねば宿にある櫻の花の散れる頃かも

紀女郎が合榊木の花と茅花とを折り攀ぢて、大伴宿禰家持に贈れる歌二首
一四〇 戲奴が爲め吾が手も數に春の野に抜ける茅花ぞ御食して肥え座せ
一四一 晝は咲き夜は戀寝る合榊木の花吾のみ見めや和氣さへに見よ

大伴家持が贈和ふる歌二首

一四二 吾が君に戲奴は戀ふらし給りたる茅花を食めど彌瘦せに瘦す

一四三 吾妹子が形身の合榊木は花のみに咲きて蓋しく實に成らじかも

大伴家持が坂上大嬢に贈れる歌一首

一四四 春霞棚引く山の隔れ、ば妹に逢はずて月ぞ經にける

右久瀨京より寧樂の宅に贈る、

夏雑歌

藤原夫人の歌一首

一四五 霍公鳥痛くな鳴きそ汝が聲を五月の玉に相貫くまでに

志貴皇子の御歌一首

一四六 神名火の磐瀬の杜の霍公鳥毛無の岳に何時か來鳴かむ

弓削皇子の御歌一首

一四七 時鳥無かる國にも行きてしか其鳴く聲を聞けば辛苦しも

小治田廣瀬王の霍公鳥の歌一首

一四八 霍公鳥聲聞く小野の秋風に萩咲きぬれや聲の乏しき

沙彌が霍公鳥の歌一首

一四九 足引の山時鳥汝が鳴けば家なる妹し常に思ほゆ

刀理宣令が歌一首

一五〇 物部の石瀬の杜の霍公鳥今も鳴かぬか山の常陰に

山部宿禰赤人が歌一首

一五一 戀しけば形身にせむと我が宿に植ゑし藤浪今咲きにけり

式部大輔石上堅魚朝臣が歌一首

一五二 霍公鳥來鳴き響もす卯の花の共やなりしと問はましものを

右、神龜五年戊辰、太宰帥大伴卿の妻大伴郎女、病に遇ひて長逝せり、時に勅使式部大輔石上朝臣堅魚を太宰府に遣して、喪を弔ひ並に物を賜ひき、其事既に畢り驛使及びひ府の諸卿大夫等、共に記夷城に登りて、望遊する日、乃ち此歌を作る、

太宰帥大伴卿の和へ給へる歌一首

一四七三 橋の花散る里の霍公鳥片戀しつゝ鳴く日しぞ多き

大伴坂上郎女が筑紫の大城山を思ふ歌一首

一四七四 今もかも大城の山に霍公鳥鳴き響むらむ吾無けれども

大伴坂上郎女が霍公鳥の歌一首

一四七五 何しかも幾許戀ふる霍公鳥鳴く聲聞けば戀こそ益され

小治田朝臣廣耳が歌一首

一四七六 獨り居て物思ふ夕に霍公鳥此間よ鳴き渡る心しあるらし

大伴家持が霍公鳥の歌一首

一四七七 卯の花も未だ咲かねば霍公鳥佐保の山邊に來鳴き響もす

大伴家持が橋の歌一首

一四七八 吾が宿の花橋の何時しかも珠に貫くべく其實成りなむ

大伴家持が晚蟬の歌一首

一四八九 隠りのみ居れば鬱悒み慰むと出で立ち聞けば來鳴く晚蟬

大伴書持が歌二首

一四八〇 我宿に月押照れり時鳥心ある今夜來鳴き響もせ

一四八一 我宿の花橋にほとゝぎす今こそ鳴かめ友に遇へる時

大伴清繩が歌一首

一四八二 皆人の待ちし卯の花散りぬとも鳴く霍公鳥吾忘れめや

庵君諸立が歌一首

一四八三 吾が背子が宿の橋花を好み鳴く時鳥見にぞ吾が來し

大伴坂上郎女が歌一首

一四八四 霍公鳥痛くな鳴きそ獨り居て寐の寝らえぬに聞けば苦しも

大伴家持が唐棣花の歌一首

一四八五 夏設けて咲きたる康棣花久方の雨打降らば移ひなむか

大伴家持が霍公鳥の晚噴を恨む歌二首

一四八六 吾が宿の花橋を霍公鳥來鳴かす地に散らしたむとか

一四八七 霍公鳥思はずありき木の暗の如此なるまでに奈何か來鳴かぬ

大伴家持が霍公鳥を權ぶ歌一首

一四八八 何處には鳴きもしにけむ霍公鳥吾家の里に今日のみぞ鳴く

大伴家持が橘花を惜しむ歌一首

一四九 吾が宿の花橘は散り過ぎて珠に貫くべく實に成りにけり

大伴家持が霍公鳥の歌一首

一四九〇 霍公鳥待てど來鳴かず菖蒲草玉に貫く日を未だ遠みか

大伴家持が雨日霍公鳥の喧くを聞きて詠める歌一首

一四九一 卯の花の過ぎば惜しみか霍公鳥雨間も置かず此間よ鳴き渡る

橋の歌一首 遊行女婦

一四九二 君が家の花橘は成りにけり花なる時に逢はましものを

大伴村上が橋の歌一首

一四九三 吾が宿の花橘を霍公鳥來鳴き響めて地に散らしつ

大伴家持が霍公鳥の歌二首

一四九四 夏山の木末の繁に霍公鳥鳴き響むなる聲の遙けさ

一四九五 足引の木の間立ち潛く霍公鳥如此聞き始めて後戀ひむかも

大伴家持が石竹花の歌一首

一四九六 吾が宿の瞿麥の花盛なり手折りて一目見せむ兒もがも

筑波山に登らざりしを惜しむ歌一首

一四九七 筑波根に吾が行けりせば霍公鳥山彦響め鳴かましやそれ

右の一首は高橋連蟲麻呂の歌集中に出づ、

夏相歌

大伴坂上郎女が歌一首

一四九八 暇なみ來まさぬ君に霍公鳥吾が如此戀ふと行きて告げこそ

大伴四繩が宴に吟へる歌一首

一四九九 事繁み君は來まさず霍公鳥汝だに來鳴け朝戸開かむ

大伴坂上郎女が歌一首

一五〇〇 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ戀は苦しきものを

小治田朝臣廣耳が歌一首

一五〇一 霍公鳥鳴く峯の上の卯の花の憂きことあれや君が來まさぬ

大伴坂上郎女が歌一首

一五〇二 五月山花橘を君が爲め珠にこそ貫け散らまく惜しみ

紀朝臣豐河が歌一首

一五〇三 吾妹子が家の垣内の小百合花後と云へれば不許云ふに似つ

高安の歌一首

一五〇四 暇無み五月をすらに吾妹子が花橋を見ずか過ぎなむ

大神女郎が大伴家持に贈れる歌一首

一五〇五 霍公鳥鳴きし即時君が家に行けと追ひしは至りけむかも

大伴田村大嬢が妹坂上大嬢に與れる歌一首

一五〇六 故郷の奈良思の岡の霍公鳥言告げ遣りし如何に告げきや

大伴家持が橘花を繫ちて坂上大嬢に贈れる歌一首并短歌

一五〇七 何時しかと待つ吾が宿に、百枝刺し生ふる橘、玉に貫く五月を近み、實成ぬがに花咲きにけり、朝に日に出で見る毎に、氣の緒に吾が思ふ妹に、眞寸鏡清き月夜に、唯だ一目見せむまでには、散りこすな努と云ひつゝ、幾許も吾が守るものを、慨き哉醜霍公鳥、曉の心悲しきに、追へど追へど尙し來鳴きて、徒に地に散らせば、術をなみ攀ちて手折りつ、見ませ吾妹子

反歌

一五〇八 十五夜降ち清き月夜に吾妹子に見せむと思ひし宿の橘

一五〇九 妹が見て後も鳴かなむ霍公鳥花橋を地に散らしつ

大伴家持が紀郎女に贈れる歌一首

一五二〇 瞿麥は咲きて散りぬと人は言へど吾が標結し野の花にあらめやも

秋雜歌

岡本天皇御製歌一首(舒明天皇)

一五二一 夕來れば小倉の山に鳴く鹿の今夜は鳴かず寐宿にけらしも

大津皇子の御歌一首

一五二二 經もなく緯も定めず少女等が織れる紅葉に霜な降りそね

穗積皇子の御歌二首

一五二三 今朝の朝明雁が音聞きつ春日山黄葉にけらし吾が心痛し

一五二四 秋萩は咲きぬべからし吾が宿の淺茅が花の散りぬる見れば

但馬皇女の御歌一首

一五二五 事繁き里に住まずは今朝鳴きし雁に副ひて行かましものを

山部王が秋葉を惜しみ給へる歌一首

一五六 秋山に匂ふ木の葉の移りなば更にや秋を見まく欲りせむ

長屋王の歌一首

一五七 味酒三輪の齋ひの山照す秋の黄葉散らまく惜しも

山上憶良が七夕の歌十二首

一五八 天漢相向き立ちて吾が戀ひし君來座すなり下紐解き設けな

右養老八年七月七日令に應じて作る、

一五九 久方の天漢瀬に船泛けて今夜か君が我許來まさむ

右神龜元年七月七日夜左大臣宅にて作る、

一五〇 牽牛は織女と、天地の別れし時ゆ、稻席河に向き立ち、思ふ心安からなくに、嘆く心安からなくに、蒼浪に望は絶えぬ、白雲に涙は盡きぬ、如是のみや氣衝き居らむ、如是のみや戀ひつゝあらむ、さ丹塗の小船もがも、玉纏の眞榜もがも、朝和にい掻き渡り、夕潮にい撈ぎ渡り、久方の天の河原に、天飛ぶや領巾片敷き、眞玉手の玉手指交へ、數多度宿も寐てしかも、秋にあらずとも

反歌

一五二 風雲は二つの岸に通へども吾が遠妻の言ぞ通はぬ

一五三 礫にも投げ越しつべき天漢隔てればかもあまた術なき

右、天平元年七月七日夜、憶良天河を仰ぎ見て作る、一に云ふ、帥の家にて作る、

一五四 秋風の吹きにし日より何時しかと吾が待ち戀ひし君ぞ來座せる

一五五 天漢いと河波は立たねども侍従ひ難し近き此瀬を

一五六 袖振らば見もかはしつべく近けども渡る術なし秋にしあらねば

一五七 玉蜻蛉の髣髴に見えて別れなばもとなや戀ひむ逢ふ時までは

右、天平三年七月八日夜、帥の家の集會、

一五八 牽牛の妻迎へ船撈ぎ出らし天の河原に霧の立てるは

一五九 霞立つ天の河原に君待つとい往還ふ程に裳の裾沾れぬ

一六〇 天の河浮津の浪音さわぐなり吾が待つ君し舟出すらしも

太宰諸卿大夫并官人等が筑前國蘆城の驛家に宴する歌二首

一六一 女郎花秋萩交る蘆城の野今日を始めて萬代に見む

一六二 玉匣蘆城の河を今日見れば萬代までに忘らえめやも

右の二首は作者未詳

笠朝臣金村が伊香山にて詠める歌二首

- 一五三二 草枕旅行く人も行き觸れば匂ひぬべくも咲ける萩かも
- 一五三三 伊香山野邊に咲きたる萩見れば君が家なる尾花し思ほゆ

石川朝臣老夫が歌一首

- 一五四 女郎花秋萩折らな玉梓の道行き裏と乞はむ兒の爲

藤原宇合卿の歌一首

- 一五五 我が背子を何時ぞ今かと待つ並に面やは見えむ秋の風吹く

縁達師が歌一首

- 一五六 暮に逢ひて朝面無み隱野の萩は散りにき黄葉早や續げ

山上臣憶良が秋野の花を詠める歌二首

- 一五三七 秋の野に咲きたる花を指折りかき數ふれば七種の花 其一
- 一五三八 萩の花尾花葛花翟麥の花女郎花また藤袴朝顔の花 其二

天皇御製歌二首(聖武天皇)

- 一五三九 秋の田の穂田を雁がね闇けくに夜の明頃にも鳴き渡るかも
- 一五四〇 今朝の朝明雁がね寒く聞きし並野邊の淺茅ぞ色付きにける

太宰帥大伴卿の歌二首

- 一五四一 吾が岳にさを鹿來鳴く初萩の花妻問ひに來鳴くさを鹿
- 一五四二 吾が岳の秋萩の花風を痛み散るべくなりぬ見む人もがも

三原王の歌一首

- 一五四三 秋の露は移なりけり水鳥の青葉の山の色付く見れば

湯原王の七夕の歌二首

- 一五四四 牽牛の思ひ座すらむ情よも見る吾苦し夜の更け行けば
- 一五四五 織女の袖纏く夜の曉は河瀬の鶴は鳴かすともよし

市原王の七夕の歌一首

- 一五四六 妹許と吾が行く道の河なれば足結正すと夜ぞ更けにける

藤原朝臣八東が歌一首

- 一五四七 さ牡鹿の萩に貫きける露の白玉、大方に誰の人かも手に纏かむ云ふ

大伴坂上郎女が晩萩の歌一首

- 一五四八 咲く花も移變ふは憂し奥手なる長き意になほ如かずけり

典鑄正紀朝臣鹿人が衛門大尉大伴宿禰稻公が跡見庄に至りて詠める歌一首

一五四 射目立ちて跡見の丘邊の瞿麥の花、多量手折り吾は持ち去なむ奈良人の爲

湯原王の鳴鹿の歌一首

一五五 秋萩の散りの亂に呼び立て、鳴くなる鹿の聲の遙けさ

市原王の歌一首

一五二 時待ちて時雨の雨の降り敷くに朝香の山の黄變ひぬらむ

湯原王の蟋蟀の歌一首

一五三 夕月夜心も萎ぬに白露の置く此庭に蟋蟀鳴くも

衛門大尉大伴宿禰稻公が歌一首

一五三 時雨の雨間無くし降れば三笠山木末普く色附きにけり

大伴家持が和ふる歌一首

一五四 皇の三笠の山の黄葉は今日の時雨に散りか過ぎなむ

安貴王の歌一首

一五五 秋立ちて幾日もあらねば此宿ぬる朝明の風は袂寒しも

忌部首黒麻呂が歌一首

一五六 秋田刈る假廬も未だ壞たねば雁がね寒し霜も置きぬがに

故郷の豊浦寺の尼が私房に宴する歌三首

一五七 明日香河行き廻む岳の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ

右の一首は丹比真人國人

一五六 鶉鳴く古りにし郷の秋萩を思ふ人遠相見つるかも

一五九 秋萩は盛過ぐるを 徒に挿頭に挿さず還りなむとや

右の二首は沙彌尼等

大伴坂上郎女が跡見田庄にて詠める歌二首

一六〇 妹が目を跡見の埒なる秋萩は此月頃は散りこすな努

一六一 吉名張の猪養の山に伏す鹿の妻呼ぶ聲を聞くが面白しさ

巫部麻蘇娘子が雁の歌一首

一六二 誰聞きつ此間よ鳴き渡る雁がねの妻呼ぶ聲の面白しきまでに

大伴家持が和ふる歌一首

一六三 聞きつやと妹が問はせる雁がねは眞も遠く雲隠るなり

日置長枝娘子が歌一首

一六四 秋づけば尾花が上に置く露の消ぬべくも吾は思ほゆるかも

大伴家持が歌一首

一五五 吾が宿の一村萩を思ふ兒に見せず殆散らしつるかも

大伴家持が秋の歌四首

一五六 久堅の雨間も置かず雲隠り鳴きぞ行くなる早稲田雁がね

一五七 雲隠り鳴くなる雁の去きて居む秋田の穂立ち繁くし思ほゆ

一五八 雨隠り心鬱悒み出で見れば春日の山は色付きにけり

一五九 雨晴れて清く照りたる此月夜又更にして雲な棚引き

右の四首は天平八年丙子秋九月の作

藤原朝臣八束が歌二首

一五七〇 此處に在りて春日や何處雨障み出でてゆかねば戀ひつゝぞ居る

一五七一 春日野に時雨降る見ゆ明日よりは黄葉挿頭さむ高圓の山

大伴家持が白露の歌一首

一五七二 吾が宿の尾花が上の白露を消たすて玉に貫くものにもが

大伴村上が歌一首

一五七三 秋の雨に沾れつゝ居れば賤しけど吾妹が宿し思ほゆるかも

右大臣橘家にて宴する歌七首

一五七四 雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむと徘徊り來つ

一五七五 雲の上に鳴きつる雁の寒き並萩の下葉は黄變つるかも

右二首(この下に作者の名を脱せるならむ)

一五七六 此岳に小鹿履み起し窺狙ひ左も右もすらく君故にこそ

右の一首は長門守巨曾倍朝臣津島

一五七七 秋の野の尾花が末を押靡べて來しくも驗く逢へる君かも

一五七八 今朝鳴きて行きし雁がね寒みかも此野の淺茅色付きにける

右の二首は阿部朝臣蟲麻呂

一五七九 朝戸開けて物思ふ時に白露の置ける秋萩見えつゝもとな

一五八〇 さを鹿の來立ち鳴く野の秋萩は露霜負ひて散りにしものを

右の二首は文忌寸馬養

(天平十年戊寅秋八月二十日)

橘朝臣奈良麻呂が宴する時の歌十一首

一五八一 手折らすて散らば惜しみと我が思ひし秋の黄葉を挿頭しつるかも

一五八二 愛らしき人に見せむと黄葉を手折りぞ我が來し雨の降らくに

右の二首は橘朝臣奈良麻呂

一五八三 黄葉を散らす時雨に沾れて來て君が黄葉を挿頭しつるかも

右の一首は久米女王

一五八四 愛らしと吾が思ふ君は秋山の初黄葉に似てこそありけれ

右の一首は長忌寸娘

一五八五 奈良山の峰の黄葉取れば散る時雨の雨し間無く降るらし

右の一首は内舍人縣犬養宿禰吉男

一五八六 黄葉を散らまく惜しみ手折り來て今夜挿頭しつ何か思はむ

右の一首は縣犬養宿禰持男

一五八七 足引の山の黄葉今夜もか浮び行くらむ山川の瀬に

右の一首は大伴宿禰書持

一五八八 奈良山を匂ふ黄葉手折り來て今夜挿頭しつ散らば散るとも

右の一首は三手代人名

一五八九 露霜に逢へる黄葉を手折り來て妹と挿頭しつ後は散るとも

右の一首は秦許遍麻呂

一五九〇 十月時雨に逢へる黄葉の吹かば散りなむ風の任意に

右の一首は大伴宿禰池主

一五九一 黄葉の過ぎまく惜しみ思ふ達遊ぶ今夜は明けずもあらぬか

右の一首は内舍人大伴宿禰家持

以前冬十月十七日、右大臣橘卿之舊宅に集ひて宴飲せる也、

大伴坂上郎女が竹田庄にて詠める歌二首

一五九二 默あらず五百代小田を刈亂り田廬に居れば京師し思ほゆ

一五九三 隱口の泊瀬の山は色附きぬ時雨の雨は降りにけらしも

右天平十一年己卯秋九月の作、

佛前唱歌一首

一五九四 時雨の雨間無くな降りそ紅に匂へる山の散らまく惜しも

右冬十月、皇宮後の維摩講に、終日大唐高麗等の種々の音楽を供養り、爾乃此謂詞を唱ふ、彈琴は市原王、忍坂王、歌子は田口朝臣家守、河邊朝臣東人、置始連長谷等十數人也、

大伴宿禰像見歌一首

一五五 秋萩の枝も撓々に降る露の消なば消ぬとも色に出でめやも

大伴宿禰家持が娘子が門に到りて詠める歌一首

一五六 妹が家の門田を見むと打ち出来し心も著く照る月夜かも

大伴宿禰家持が秋の歌三首

一五七 秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露置けり

一五八 さを鹿の朝立つ野邊の秋萩に玉と見るまで置ける白露

一五九 さを鹿の胸別にかも秋萩の散り過ぎにける盛かも去ぬる

右天平十五年癸未秋八月、物色を見る作、

内舍人石川朝臣廣成が歌二首

一六〇 妻戀ひに鹿鳴く山邊の秋萩は露霜寒み盛時過ぎ行く

一六一 愛しき君が家なる幡芒穂に出る秋の過ぐらく惜しも

大伴宿禰家持が鹿鳴の歌二首

一六二 山彦の相響むまで妻戀ひに鹿鳴く山邊に一人のみして

一六三 此頃の朝明に聞けば足引の山を響もしさを鹿鳴くも

右の二首は天平十五年癸未八月十六日の作、

大原真人今城が寧樂の故郷を傷惜む歌一首

一六四 秋來れば春日の山の黄葉見る寧樂の京の荒るらく惜しも

大伴宿禰家持が歌一首

一六五 高圓の野邊の秋萩此頃の曉露に咲きにけむかも

秋相聞

額田王の近江天皇を思ひて詠み給へる歌一首

一六六 君待つと吾が戀ひ居れば我が宿の簾動かし秋の風吹く

鏡女王の詠み給へる歌一首

一六七 風をだに戀ふるは乏し風をだに來むとし待たば何か歎かむ

弓削皇子の御歌一首

一六八 秋萩の上に置きたる白露の消かもしなまし戀ひつゝあらずは

丹比真人が歌一首

一六九 宇陀の野の秋萩凌ぎ鳴く鹿も妻に戀ふらく吾には益さじ

丹生女王の太宰帥大伴卿に贈りたまへる歌一首

一六〇 高圓の秋野の上の瞿麥の花、心若み人の挿頭し、瞿麥の花

笠縫女王の歌一首

一六一 足引の山下響み鳴く鹿の聲ともしかも吾が心妻

石川賀係女郎が歌一首

一六二 神さぶと不許にはあらず秋草の結びし紐を解くは悲しも

賀茂女王の歌一首

一六三 秋の野を朝行く鹿の跡もなく思ひし君に逢へる今夜か

右の歌、或は云ふ、椋橋部女王、或は云ふ笠縫女王の作、

遠江守櫻井王の天皇（聖武）に奉らせる歌一首

一六四 九月の其初雁の使にも思ふ心は聞え來ぬかも

天皇賜報和へませる歌一首

一六五 大の浦の其長濱に寄する浪竟けく君を思ふ此頃

笠女郎が大伴宿禰家持に贈れる歌一首

一六六 毎朝に見る吾が宿の瞿麥が花にも君はありこせぬかも

山口女王の大伴宿禰家持に贈り給へる歌一首

一六七 秋萩に置きたる露の風吹きて落つる涙は留みかねつも

湯原王の娘子に贈り給へる歌一首

一六八 玉に貫き消たす賜らむ秋萩の末亂葉に置ける白露

大伴家持が妹坂上郎女の竹田庄に至りて詠める歌一首

一六九 玉梓の道は遠けど愛しきやし妹を相見に出で、ぞ吾が來し

大伴坂上郎女が和ふる歌一首

一七〇 荒玉の月立つつまでに來まさねば夢にし見つ、思ひぞ吾がせし

右の二首は天平十一年己卯秋八月の作、

平部麻蘇娘子が歌一首

一七一 我が宿の萩が花咲けり見に來座せ今日ばかり有らば散りなむ

大伴田村大嬢が妹坂上大嬢に贈れる歌一首

一七二 吾が宿の秋の萩咲く夕影に今も見てしか妹が光儀を

一七三 吾が宿に匂ふ鶏冠木見る毎に妹を懸けつ、戀ひぬ日はなし

坂上大嬢が秋稻藏を大伴宿禰家持に贈れる歌一首

一七四 吾が蒔ける早稻田の穂立造りたる藪ぞ見つ、俣ばせ吾が背

大伴宿禰家持が報贈ふる歌一首

一六五 吾妹子が産業と作れる秋の田の早穂の蕨見れど飽かぬかも

又著身せる衣を脱ぎて家持に贈れるに報ふる歌一首

一六六 秋風の寒き此頃下に著む妹が形身と目も惚ばむ

右の三首は天平十一年己卯秋九月往來す、

大伴宿禰家持が非時の藤花并萩の黄葉の二物を攀りて坂上大嬢に贈れる歌二首

一六七 吾が宿の非時藤の珍しく今も見てしか妹が笑顔

一六八 吾が宿の萩の下葉は秋風も未だ吹かねば如此ぞ黄變てる

右の二首は天平十二年庚辰夏六月往來す、

大伴宿禰家持が坂上大嬢に贈れる歌一首并短歌

一六九 叮嚀に物を思へば、言はむ術爲む術もなし、妹と吾が手携はりて、朝には庭に出で立ち、夕には床打拂ひ、白妙の袖指交へて、さ寐し夜や常に有りける、足引の山鳥こそは、峰向ひに妻問すと云へ、打蟬の人なる我や、何爲とか一日一夜も、離り居て嘆き戀ふらむ、是思へば胸こそ痛め、其故に心和ぐやと、高圓の山にも野にも、打行きて遊び往けど、花のみし匂ひてあれば、見る毎に益して惚ばゆ、如何にして忘れむものぞ、戀云ふものを

反歌

一六〇 高圓の野邊の容花面影に見えつゝ妹は忘れかねつも

大伴宿禰家持が安倍女郎に贈れる歌一首

一六一 今造る久邇の京に秋の夜の長きに一人宿るが苦しき

大伴宿禰家持が久邇の京より奈良の宅に留れる坂上大嬢に贈れる歌一首

一六二 足引の山邊に居りて秋風の日に日に吹けば妹をしぞ思ふ

或者の尼に贈れる歌二首

一六三 手も數に植多し萩にや却りては見れども飽かず心盡さむ

一六四 衣袖に水滌附くまで植多し田を引板吾が延へ守れる苦し

尼が頭句を詠み并大伴宿禰家持が尼に詠へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首

一六五 佐保河の水を塞き上げて植多し田を (尼作) 刈る早飯は獨り嘗むべし (家持續)

冬雑歌

舍人娘子が雪の歌一首

一六六 大口の眞神の原に降る雪は甚くな降りそ家もあらなくに

太上天皇御製歌一首(元正)

一六七 幡^{はた}芒^す尾^お花^{はな}逆^{さか}葺^き黒^{くろ}木^き以^もち造^{つく}れる宿^{しゆく}は萬^ま代^{だい}まで

天皇御製歌(聖武)

一六八 青^{あお}丹^に吉^{よし}奈^な良^らの山^{やま}なる黒^{くろ}木^き以^もち造^{つく}れる宿^{しゆく}は座^ませど飽^あかぬかも

右之を聞く、左大臣長屋王の佐保の宅に御座して肆宴の御製、

太宰帥大伴卿の冬日雪を見て京を憶ひ給ふ歌一首

一六九 沫^{あわゆき}雪^{ゆき}の離^{はな}々に降^{ふり}重^しけば平^{ひら}城^らの京^{みやこ}し思^{おも}ほゆるかも

太宰帥大伴卿の梅の歌一首

一七〇 吾^あが岳^{たけ}に盛^{さか}に咲^さける梅^{うめ}の花^{はな}残^{のこ}れる雪^{ゆき}を紛^{まが}へつるかも

角朝臣廣辨が雪のうちの梅の歌一首

一七一 沫^{あわゆき}雪^{ゆき}に降^{ふり}らえて咲^さける梅^{うめ}の花^{はな}君^{きみ}許^{りや}遣^やらば比^よへてむかも

安倍朝臣奥道が雪の歌一首

一七二 棚^{たな}引^ひ霧^{きり}ひ雪^{ゆき}も降^{ふり}らぬか梅^{うめ}の花^{はな}咲^さかぬが代^{しろ}に比^よへてだに見^みむ

若櫻部朝臣君足が雪の歌一首

一七三 天^{あま}霧^{きり}らし雪^{ゆき}も降^{ふり}らぬか灼^あ然^{じら}く此^こ五^い柴^しに降^{ふり}らまくを見^みむ

三野連石守が梅の歌一首

一七四 引^ひ攀^きぢて折^ひらば散^ちるべみ梅^{うめ}の花^{はな}袖^{そで}に扱^こ入^きれつ染^しまば染^しむとも

巨勢朝臣宿奈麻呂が雪の歌一首

一七五 吾^あが宿^{しゆく}の冬^{ふゆ}木^きの上^のに降^{ふり}る雪^{ゆき}を梅^{うめ}の花^{はな}かと打^うち見^みつるかも

小治田朝臣東麻呂が雪の歌一首

一七六 夜^よ干^ほ玉^{たま}の今^け夜^よの雪^{ゆき}にいさ沾^ぬれな明^あけむ朝^あに消^けなば惜^あしけむ

忌部首黒麻呂が雪の歌一首

一七七 梅^{うめ}の花^{はな}枝^えにか散^ちると見^みるまでに風^{かぜ}に亂^みれて雪^{ゆき}ぞ降^{ふり}りくる

紀少鹿女郎が梅の歌一首

一七八 十^{じゅう}二^に月^{げつ}には沫^{あわゆき}雪^{ゆき}降^{ふり}ると知^しらぬかも梅^{うめ}の花^{はな}咲^さく含^ふめらずして

大伴宿禰家持が雪のうちの梅の歌一首

一七九 今日^{けふ}降^{ふり}りし雪^{ゆき}に競^あひて我^{わが}が宿^{しゆく}の冬^{ふゆ}木^きの梅^{うめ}は花^{はな}咲^さきにけり

西池の邊に御在して肆宴す歌一首

一八〇 池^いの邊^への松^{まつ}の末^{すえ}葉^はに降^{ふり}る雪^{ゆき}は五^い百^は重^へ降^{ふり}り重^しけ明^あ日^ひさへも見^みむ

右の一首は作者未詳

大伴坂上郎女が歌一首

一六五二 沫雪の此頃續ぎて如此降らば梅の初花散りか過ぎなむ

池田廣津娘子が梅の歌一首

一六五三 梅の花折りも折らずも見つれども今宵の花になほ如かずけり

縣犬養娘子が梅に依せて思を發ふる歌一首

一六五四 今の如心を常に思へらば先づ咲く花の地に落ちめやも

大伴坂上郎女が雪の歌一首

一六五五 松蔭の淺茅が上の白雪を消たすて置かむ方法はかも無き

冬相聞

三國真人人足が歌一首

一六五六 高山の菅の葉凌ぎ降る雪の消ぬとか言はも戀の繁けく

大伴坂上郎女が歌一首

一六五七 酒杯に梅の花浮べ思ふ達飲みて後には散りぬともよし

(姓名)和ふる歌一首

一六五七 官にも許し給へり今夜のみ飲まむ酒かも散りこすなゆめ

右、酒は官禁制して曰く、京中の閭里、集宴するを得ざれ、但親親一二飲樂するは聽許すといへり、此によりて和ふる人此發句を作れり、

藤原皇后の天皇に奉らせる御歌一首

一六五八 吾が背子と二人見ませば幾許か此降る雪の懼しからまし

池田廣津娘子が歌一首

一六五九 眞木の上に降り置ける雪の重々も思ほゆるかもさ夜訪へ吾が夫

大伴宿禰駿河麻呂が歌一首

一六六〇 梅の花散らす嵐の音のみに聞きし吾妹を見らくし吉しも

紀少鹿女郎が歌一首

一六六一 久方の月夜を清み梅の花心に咲きて吾が思へる君

大伴田村大娘が妹坂上大娘に贈れる歌一首

一六六二 沫雪の消ぬべきものを今までに存命經るは妹に遇はむとぞ

大伴宿禰家持が歌一首

一六六三 沫雪の庭に降積き寒き夜を手枕纏かず一人かも宿む

卷八終

卷九

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇(雄略)御製歌一首

一六四 暮來れば小椋の山に臥す鹿の今夜は鳴かず寝ねにけらしも

岡本宮御宇天皇(舒明)の紀伊國に幸せる時の歌二首

一六五 妹が爲め吾が玉拾ふ沖邊なる玉寄せ持ち來沖つ白浪

一六六 朝霧に沾れにし衣干さずして一人や君が山路越ゆらむ

右の二首作者未詳

大寶元年辛丑多十月、太上天皇(持統)大行天皇(文武)紀伊國に幸せる時の歌十三首

一六七 妹が爲め吾が玉求む沖邊なる白玉寄せ來沖つ白浪

右の一首は上に既に見え畢りぬ、但歌の辭少しく換り、年代相違へり、因つて以て累ね載す、

一六八 白崎は幸く在り待て大船に眞楫繁貫き又歸り見む

一六九 三名部の浦潮な満ちそね鹿島なる釣する海人を見て歸り來む

一六七〇 朝開き撈ぎ出て我は湯羅の崎釣する海人を見て歸り來む
 一六七〇 湯羅の崎潮干にけらし白神の磯の浦回を喘べて撈ぎ動む
 一六七〇 黒牛潟潮干の浦を紅の玉裳裾びき行くは誰が妻
 一六七〇 風早の浦の白波徒に此處に寄せ來も見る人無しに

右の一首は山上臣憶良の類聚歌林に曰く、長忌寸意吉麻呂、詔に應じて此歌を作ると、

一六七〇 我背子が使來むかと出立の此松原を今日か過ぎなむ
 一六七〇 藤白の御坂を越ゆと白妙の我が衣手は沾れにけるかも
 一六七〇 勢の山に黄葉散り敷く神岳の山の黄葉は今日か散るらむ
 一六七〇 大和には聞えも行くか大家野の小竹葉刈敷き慮せりとは
 一六七〇 紀の國の昔獵夫の響矢以ち鹿捕り靡けし坂の上にぞある
 一六七〇 紀の國に止まず通はむ妻の社妻倚し來せね妻と言ひながら

右の一首は或は云ふ坂上忌寸人長の作、

後人の歌二首

一六八〇 朝裳吉し紀伊へ行く君が信土山越ゆらむ今日ぞ雨な降りそね
 一六八一 後れ居て吾が戀ひ居れば白雲の棚引く山を今日か越ゆらむ

忍壁皇子に献れる歌一首 詠仙 人形

一六八二 常に夏冬經行けや 袂扇放たぬ山に住む人

舍人皇子に献れる歌二首

一六八三 妹が手を取りて引き攀ち打手折り君が挿頭すべき花咲けるかも
 一六八四 春山は散り過ぎぬれども三輪山は未だ含めり君待ちがてに

泉河の邊にて間人宿禰が詠める歌二首

一六八五 河の瀬の激水つを見れば玉もかも散り亂れたる此河門かも
 一六八六 彦星の挿頭の玉の妻戀ひに亂れにけらし此河の瀬に

鷺坂にて詠める歌一首

一六八七 白鳥の鷺坂山の松蔭に宿りて行かな夜も更け行くを

名木河にて詠める歌二首

一六八八 焱り干す人もあれやも濡衣を家には遣らな旅の印に
 一六八九 荒磯邊に附きて撈がさね京人濱を過ぐれば戀しくあるなり

高島にて詠める歌二首

一六九〇 高島の阿渡川波は騒げども吾は家思ふ宿悲しみ

一六九 旅なれば夜中を指して照る月の高島山に隠らく惜しも

紀伊國にて詠める歌二首

一六九二 吾が戀ふる妹は逢はさす玉の浦に衣片敷き一人かも寐む

一六九三 玉匣明けまく惜しき惜夜を袖離れて一人かも寐む

鷺坂にて詠める歌一首

一六九四 細比禮の鷺坂山の白蹲躑吾に匂はね妹に示さむ

泉河にて詠める歌一首

一六九五 妹が門入り出見河の底滑にみ雪残れり未だ冬かも

名木河にて詠める歌三首

一六九六 衣手の名木の河邊を春雨に吾立ち沾ると家思ふらむか

一六九七 家人の使なるらし春雨の避くれど吾を沾らす思へば

一六九八 焔り干す人もあれやも家人の春雨すらを間使にする

宇治川にて詠める歌二首

一六九九 巨椋の入江響むなり射目人の伏見が田井に雁渡るらし

一七〇〇 秋風の山吹の瀬の響むなべ天雲翔り雁渡るかも

弓削皇子に献れる歌三首

一七〇一 さ夜中と夜は更けぬらし雁が音の聞ゆる空に月渡る見ゆ

一七〇二 妹が邊衣雁がね夕霧に來鳴きて過ぎぬ羨しきまでに

一七〇三 雲隠り雁鳴く時に秋山の黄葉片待つ時は過ぐれど

舍人皇子に献れる歌二首

一七〇四 打手折り多武の山霧茂みかも細川の瀬に波の騒げる

一七〇五 冬隠り春邊を戀ひて植ゑし木の實に成る時を片待つ吾ぞ

舍人皇子の御歌一首

一七〇六 黒玉の夜霧ぞ立てる衣手の高屋の上に棚引くまでに

鷺坂にて詠める歌一首

一七〇七 山城の久世の鷺坂神代より春は萌りつゝ秋は散りけり

泉河の邊にて詠める歌一首

一七〇八 春草を馬昨山よ越えくなる雁が使は宿過ぐなり

弓削皇子に献れる歌一首

一七〇九 御食向ふ南淵山の巖には降れる雪か消え残りたる

右、柿本朝臣人麿の歌集に出づる所、

(題 闕)

一七〇 吾妹子が赤裳泥づちて植ゑし田を刈りて藏めむ倉無しくらなしの濱
 一七二 百傳ももつたふ八十の島廻しままを撈こぎ來けど粟あはの小島こしまは見れど飽あかぬかも

右の二首、或は云ふ、柿本朝臣人麿の作

筑波山に登りて月を詠める歌一首

一七三 天あまの原雲ねむらなき夜よに烏玉くわたまの夜渡よわたる月の入いらまく惜おしも

芳野離宮よしぬのとりみやに幸いせむ時の歌二首

一七三 瀧たきの上への三船さんふねの山やまよ秋津邊あきつべに來き鳴なき渡わたるは誰喚よぶこ子こ鳥とり

一七四 落たち激水たぎち流ながるゝ水みづの磐いはに觸ふり淀よどめる淀よどに月の影見かげみゆ

右の三首作者未詳

槐えいすの本もとが歌二首

一七五 樂波らくなみの比良山風ひらの海吹うみけば釣あする海人あまの袂そでかへる見ゆ

山上やまのへが歌一首

一七六 白波しらかの濱松はまのまつの木きの手向たむけ草幾代くさいくだいまでにか年は經たぬらむ

右の一首、或は云ふ、河島皇十の御作歌

春日かすがが歌一首

一七七 三河みつかはの淵瀬ふみも落おちず纏刺むすすに衣手ころもてぬ濡ぬれぬ干ほす兒こは無なしに

高市たかちが歌一首

一七八 率あつちひて撈あぎにし船ふねは高島たかしまの阿渡あどの港みなとに泊はてにけむかも

春日藏かすがのくらが歌一首

一七九 照ある月つきを雲くもな隠かくしそ島陰しまかげに吾わがが船泊ふねてむ湊知みなとらずも

元仁げにが歌三首

一七〇 馬並うまなめて打集うちむれ越こえ來き今日見けふみつる芳野よしぬの川がはを何時反いつときり見みむ

一七二 辛くる苦くしくも晚くれぬる日ひかも吉野川よしのがは清きよき河原がはらを見れど飽あかなくに

一七三 吉野川よしのがは河波がはなみ高たかみ瀧たきの裏うらを見みずかなりなむ戀こしけまくに

絹きぬが歌一首

一七三 河蝦かばつ鳴なく六田むつたの川がはの川楊かはやぎの町ねもころ嚙かみ飽あかぬ君きみかも

島足しまあしが歌一首

一七四 見みまく欲ほり來きしくも驗しるく吉野川よしのがは音ねの清きよけさ見みるに面おも白しろしき

麻呂が歌一首

一七五 古の賢しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも

右柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

丹比真人が歌一首

一七六 難波潟潮干に出で、玉藻刈る海少女等汝が名告らさね

某娘子が和ふる歌一首

一七七 漁する海人とを見ませ草枕旅行く人に妻とは告らじ

石河卿の歌一首

一七八 慰めて今夜は寐なむ明日よりは戀ひかも行かむ此處よわかれなば

宇合卿の歌三首

一七九 曉の夢に見えつゝ梶島の磯越す浪の頻てし思ほゆ

一八〇 山科の石田の小野の柞原見つゝや君が山路越ゆらむ

一八一 山科の石田の社に手向せば蓋し吾妹に直に逢はむかも

碁師が歌三首

一八二 大葉山霞棚引きさ夜更けて吾が船泊てむ泊知らずも

一七三 思びつゝ來れど來かねて水尾が崎眞長の浦を又還り見つ

小辯が歌一首

一七四 高島の足利の湖を撈ぎ過ぎて鹽津菅浦今は撈がなむ

伊保麻呂が歌一首

一七五 吾が疊三重の河原の磯の裏に如是しもがもと鳴く河蝦かも

式部大倭が芳野にて詠める歌一首

一七六 山高み白木綿花に落ち激つ夏身の河門見れど飽かぬかも

兵部川原が歌一首

一七七 大瀧を過ぎて夏箕に副ひ居りて清き河瀬を見るが清けさ

上總の末の珠名娘子を詠める歌一首并短歌

一七八 水長鳥安房に繼ぎたる、梓弓末の珠名は、胸間の廣けき吾妹、腰細の螺贏娘子の、其容の端正しきに、花の如咲みて立てれば、玉梓の道行く人は、己が行く道は行かすて、召ばなくに門に至りぬ、さし並ぶ隣の君は、忽ちに己妻離れて、乞はなくに鑑さへ奉る、人の皆如是迷へれば、容艶ひ寄りてぞ妹は、戯れてありける

反歌

一七〇 金門にし人の來立てば夜中にも身はたな知らず出で、ぞ逢ひける

水江浦島子を詠める歌一首并短歌

一七〇 春の日の霞める時に、住吉の岸に出で居て、釣船の揺蕩ふ見れば、古の事ぞ思ほゆる、水江の浦島の子が、堅魚釣り鯛釣り誇り、七日まで家にも歸來すて、海界を過ぎて傍ぎ行くに、海若の神の女に、遑にい傍ぎ向ひ、相語らひ事成就りしかば、かき結び蓬萊山に至り、海神の神の宮の、内重の妙なる殿に、携はり二人入り居て、老いもせず死にもせずして、永世に在りけるものを、世間の愚人の、吾妹子に告りて語らく、須臾は家に歸りて、父母に事をも告らひ、明日の如吾は來なむと、言ひければ妹が答へらく、蓬萊山邊に復た歸り來て、今の如逢はむとならば、此篋開くな勤と、許多くに堅めし言を、住吉に還り來りて、家見れど家も見かねて、里見れど里も見かねて、惟しみと此時に思はく、家よ出て三年の程に、壻もなく家失せめやも、此篋を開きて見れば、舊の如家はあらむと、玉篋少し開くに、白雲の箱より出で、蓬萊山方に棚引きぬれば、立ち走り叫び袖振り、反側び蹠しつゝ、忽に心け失せぬ、若かりし膚も皺みぬ、黒かりし髪も白けぬ、後々は息さへ絶えて、後遂に壽死にける、水江の浦島の子が、家地見ゆ

反歌

一七四 蓬萊山邊に住むべきものを劔刀汝が心から鈍や此君

河内の大橋を獨り行く娘子を見て詠める歌一首并短歌

一七四 級照る片足羽川の、さ丹塗の大橋の上よ、紅の衣裳裾引き、山藍もち摺れる衣着て、唯獨りい渡らす見は、若草の夫かあるらむ、樞の實の獨りか宿らむ、間はまくの欲しき我妹が、家の知らなく

反歌

一七三 大橋の詰に家あらば心悲しく獨り行く子に宿貸さましを

武藏の小埜沼の鴨を見て詠める歌一首

一七四 埼玉の小埜沼に鴨を翼振る、己が尾に降り置ける霜を掃ふとならし

那賀郡曝井の歌一首

一七五 三栗の中に廻れる曝井の絶えず通はむ彼所に妻もが

手綱濱の歌一首

一七六 遠妻し其處にありせば知らずとも手綱の濱の尋ね來なまし

慶雲三年丙午春三月、諸卿大夫等難波に下れる時の歌二首并短歌

一七四七 白雲の龍田の山の、瀧の上の小鞍の嶺に、開き撓る櫻の花は、山高み風の息まねば、春雨

の繼ぎて降れ、ば、秀つ枝は散り過ぎにけり、下枝に残れる花は、須臾は散りな亂りそ、草枕旅行く君が、還り來むまで

反歌

一七四 吾が行は七日は過ぎじ龍田彦勤此花を風にな散らし

一七四 白雲の立田の山を、夕暮に打越え行けば、瀧の上の櫻の花は、咲きたるは散り過ぎにけり、含めるは咲き繼ぎぬべし、彼此の花の盛に、見せずとも、兎に角に天皇の行幸は、今にしあるべし

反歌

一七五 暇あらば漂ひ渡り向つ峰の櫻の花も折らましもものを

難波に宿りて明日還る時の歌一首并短歌

一七五 島山をい行き廻る、河添ひの岳邊の道よ、昨日こそ吾が越え來しか、一夜のみ宿たりしからに、岑の上の櫻の花は、瀧の瀬よ激ちて流る、天皇が見む其日までには、嵐の風な吹きそと、打越えて名に負へる杜に、風祭せな

反歌

一七五 行逢の坂の麓に咲き捲る櫻の花を見せむ兒もがも

檢稅使大伴卿の筑波山に登りたまへる時の歌一首并短歌

一七五 衣手常陸の國、二並ぶ筑波の山を、見まく欲り君來ませりと、熱けくに汗かき嘆き、木の根取り嘯き登り、岑の上を君に見すれば、男の神も許し給ひ、女の神も幸ひ給ひて、時となく雲居雨降る、筑波嶺を清に照して、鬪かりし國の眞ほらを、委曲に示し賜へば、歡しきと紐の緒解きて、家の如解けてぞ遊ふ、打靡く春見ましよは、夏草の茂くはあれど、今日の樂しさ

反歌

一七五 今日の日にか何でしかめや筑波嶺に昔の人の來けむ其日も

霍公鳥を詠める歌一首并短歌

一七五 鶯の生卵の中に、霍公鳥獨り生れて、汝が父に似ては鳴かず、汝が母に似ては鳴かず、卵の花の咲きたる野邊よ、飛び翔り來鳴き響もし、橋の花を居散らし、終日に鳴けど聞き好し、進物はせむ遠くな行きそ、我が宿の花橋に、住み渡り鳴け

反歌

一七六 搔き霧らし雨の降る夜を霍公鳥鳴きて行くなり何恰その鳥

筑波山に登る歌一首并短歌

一七五七 草枕旅の憂けくを、慰むる事もあれやと、筑波嶺に登りて見れば、尾花散る師付の田井に、雁がねも寒く來鳴きぬ、新治の鳥羽の淡海も、秋風に白浪立ちぬ、筑波嶺の吉けくを見れば、長き月日に思ひ積み來し、憂けくは息みぬ

反歌

一七五八 筑波嶺の裾廻の田井に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折らな

筑波嶺に登りて燿歌會をする日詠める歌一首并短歌

一七五九 鶯の住む筑波の山の、裳羽服津の其津の上に、率ひて少女壯士の、行き集ひ燿歌ふ燿歌に、他妻に吾も交はむ、吾が妻に他人も言問へ、此山を領知く神の、古よ禁めぬ業ぞ、今日のみは愍しもな見そ、言も咎むな

反歌

一七六〇 男の神に雲立ち登り時雨降り沾れ通るとも吾還らめや

右の件の歌は高橋連蟲麿歌集中に出づ

鳴鹿を詠める歌一首并短歌

一七六一 三諸の神邊山に、立ち向ふ三垣の山に、秋萩の妻を纏かむと、朝月夜明けまく惜しみ、足引

の山彦動め、喚立て鳴くも

反歌

一七六二 明日の夕逢はさらめやも足引の山彦動め呼立て鳴くも

沙彌女王の歌一首

一七六三 倉橋の山を高みか夜隠りに出で來る月の片待ち難き

右の一首は、間人宿禰大浦の歌中に既に見ゆ、但末の一句相換り、亦作歌の兩主、敢て正指せず、因りて以て累ね載す、

七夕の歌一首并短歌

一七六四 久方の天の河原に、上つ瀬に珠橋架し、下つ瀬に船浮け据ゑ、雨降りて風は吹くとも、風吹きて雨は降るとも、裳濕さす息ます來ませと、玉橋わたす

反歌

一七六五 天の河霧立ち渡る今日今日と吾が待つ君が船出すらしも

右の件の歌、或は云ふ、中衛大將藤原北卿の宅にて作れるなりと、

相聞

振田向宿禰が筑紫國に退る時の歌一首
吾妹子は劍にあらなむ左手の吾が奥の手に纏きて去なましを

拔氣大首が筑紫に任けらるゝ時、豊前國娘子紐兒に娶ひて詠める歌三首

一七六 豊國の香春は我家紐兒にい縫着り居れば香春は我家

一七六 石の上振の早田の穂には出でず心の中に戀ふる此頃

一七九 如是のみし戀ひし渡れば靈刻生命も吾は惜けくもなし

大神大夫が長門守に任けらるゝ時、三輪河の邊に集ひて宴する歌二首

一七〇 三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脉し絶えずば吾忘れめや

一七二 後れ居て吾はや戀ひむ春霞棚引く山を君が越えなば

右の二首は、古歌集中に出づ、

大神大夫が筑紫國に任けらるゝ時、阿部大夫が詠める歌一首

一七三 後れ居て吾はや戀ひむ稻見野の秋萩見つゝ去なむ兒故に

弓削皇子に獻れる歌一首

一七三 神南備の神依板に爲る杉の思も過ぎず戀の茂きに

舍人皇子に獻れる歌二首

一七四 垂乳根の母の命の言にあらば年の緒長く憑み過ぎむや

一七五 泊瀬川夕渡り來て我妹子が家の金門に近づきにけり

右の三首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

石河大夫が任を遷されて京に上る時、播磨娘子が贈れる歌二首

一七六 絶等木の山の岑の上の櫻花咲かむ春邊は君を偲ばむ

一七七 君なくば如何ぞ身裝飾はむ匣なる黄楊の小櫛も取らむとも思はず

藤井連が任を遷されて京に上る時、娘子が贈れる歌一首

一七八 明日よりは吾は戀ひむな名欲山石踏み平し君が越えなば

藤井連が和ふる歌一首

一七九 生命をし眞幸くもがも名欲山石踏み平し復た歸り來む

鹿島郡刈野橋にて大伴卿に別るゝ歌一首并短歌

一八〇 牡牛の三宅の浦に、指向ふ鹿島の崎に、さ丹塗りの小船を設け、玉纏の小楫繁貫き、夕汐の満の湛に、御船子を率ひ立て、呼び立て、御船出でなば、濱も狭に後れ並み居て、反側び戀ひかも居らむ、足摩し哭のみや泣かむ、海上の其津を指して、君が撈ぎ行かば

反歌

一七二 海つ路の和ぎなむ時も渡らなむ斯く立つ浪に船出すべしや

右の二首は高橋連蟲麿の歌集中に出づ、

妻に贈れる歌一首

一七二 雪こそは春日消ゆらめ心さへ消え失せたれや言も通はぬ

妻か和ふる歌一首

一七三 松反り強言にてあれやも三粟の月半過ぎて來す待つと言へや使童

右の二首は柿本朝臣人麿の歌集中に出づ、

入唐使に贈れる歌

一七四 海若の何れの神を齋祈らばか行方も來方も船の早けむ

神龜五年戊辰秋八月に詠める歌一首并短歌

一七五 人と成る事は難きを、邂逅に成れる我身は、死にも生きも君が隨意と、思ひつゝありし間に、虚蟬の世の人なれば、大君の御命恐み、天離る夷治めにと、朝鳥の朝立たしつゝ、群鳥の群れ立ち行けば、留り居て吾は戀ひむな、見ず久ならば

反歌

一七六 み越路の雪降る山を越えむ日は留れる吾を懸けて俵ばせ

天平元年己巳冬十二月に詠める歌一首并短歌

一七七 虚蟬の世の人なれば、大君の御命恐み、敷島の日本の國の、石の上布留の里に、紐解かず丸寐をすれば、吾が着せる衣は穢れぬ、見る毎に戀は益れど、色に出でば人知りぬべみ、冬の夜の明けもかねつゝ、寐も寝ずに吾はぞ戀ふる、妹が有様に

反歌

一七八 布留の山よ直に見渡す京にぞ寐を宿す戀ふる遠からなくに

一七九 吾妹子が結びてし紐を解かめやも絶えば絶ゆとも直に逢ふまでに

右の件の五首は笠朝臣金村の歌集中に出づ、

天平五年癸酉、遣唐使の船難波より入海の時、親母が子に贈れる歌一首并短歌

一七〇 秋萩を妻問ふ鹿こそ、一子を持たりと言へ、鹿兒自物吾が獨子の、草枕旅にし行けば、竹珠を繁に貫き垂り、齋瓮に木綿取り垂で、齋ひつゝ吾が思ふ吾子、眞幸くありこそ

反歌

一七一 旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽裏め天の鶴群

娘子を思ひて詠める歌一首并短歌

一七二 白玉の人の其名を、中々に辭の緒延へず、逢はぬ日の數多く過ぐれば、戀ふる日の累り行

けば、思ひ遣る手段を不知に、肝向ふ心摧けて、珠襪懸けぬ時無く、口息ます吾が戀ふる
兒を、玉釧手に纏き持ちて、眞十鏡直目に見ねば、下檜山下行く水の、上に出でず吾が思
ふ心、安からぬかも

反歌

一七九三 垣穂なす人の横言繁みかも逢はぬ日數多く月の經ぬらむ

一七九四 立易る月重りて逢はねども眞實忘らえず面影にして

右の三首は田邊幸麿の歌集に出づ、

挽歌

宇治若郎子の宮所の歌一首

一七九五 妹許と今木の嶺に茂み立てる妻松の木は吉人見けむ

紀伊國にて詠める歌四首

一七九六 黄葉の過ぎにし子等と携はり遊びし磯を見れば悲しも

一七九七 鹽煙立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形身とぞ來し

一七九八 古に妹と我が見し黒玉の黒牛瀉を見れば不樂しも

一七九九 玉津島磯の浦回の眞砂にも匂ひて行かな妹が觸りけむ

右の四首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

足柄坂を過ぐる時、死人を見て詠める歌一首

一八〇〇 小垣内の麻を引き干し、妹なねが作り着せけむ、白妙の紐をも解かず、一重結ふ帯を三重
結び、苦しきに仕へ奉りて、今だにも本國に罷還りて、父母も妻をも見むと、思ひつゝ行
きけむ君は、鳥が鳴く東の國の、恐きや神の御坂に、和細布の衣寒らに、烏玉の髪は亂れ
て、國間へど國をも告らず、家問へど家をも言はず、丈夫の行きの進に、此處に臥せる

葦屋處女が墓を過ぐる時詠める歌一首并短歌

一八〇一 古の益荒壯士の、相競ひ妻問ひしけむ、葦屋の菟原處女の、奥津城を吾が立ち見れば、
永き世の語にしつゝ、後人の偲にせむと、玉梓の道の邊近く、磐構へ作れる墓を、天雲の
至極の隈、此道を行く人毎に、行き寄りてい立ち嘆かひ、里人は哭にも鳴きつゝ、語りつ
ぎ偲びつぎ來し、處女等が奥津城所、吾さへに見れば悲しも、古 思へば

反歌

一八〇二 古の小竹田男子の妻問ひし菟原處女の奥津城ぞ是れ

一八〇三 語繼ぐ故にも許多戀ほしきを直目に見けむ 古 男子

弟の死去れるを哀みて詠める歌一首并短歌
一八〇四 父母が育成の任に、箸向ふ弟の命は、朝露の消易き命、神の共争ひかねて、葦原の水穂の

國に、家無みや又還り來ぬ、遠つ國黄泉の界に、蔓ふ蔦の各も各も、天雲の別れし行けば、
闇夜なす思ひ迷はひ、所射猪鹿の心を痛み、葦垣の思ひ亂れて、春鳥の啼のみ泣きつゝ、
味澤相夜晝と云はず、蜻蛉の心燃えつゝ、嘆きぞ吾がする

反歌

一八〇五 別れても復も逢ふべく思ほえは心亂れて吾戀ひめやも

一八〇六 足引の荒山中に葬送り置きて還らふ見れば心苦しも

右の七首は田邊福麿の歌集に出づ、

勝鹿の眞間娘子を詠める一歌首并短歌

一八〇七 雞が鳴く吾妻の國に、古にありける事と、今までに絶えず言ひ來る、勝鹿の眞間の手兒奈

が、麻衣に青衿着け、直さまを裳には織り着て、髪だにも搔きは梳らす、履をだに穿かず
行けど、錦綾の中に裏める、齋兒も妹に如かめや、望月の滿れる面に、花の如咲みて立て
れば、夏蟲の火に入るが如、水門入りに船漕ぐ如く、行き妻問ひ人の訪ふ時、幾時を生け
らじものを、何爲とか身を心得りて、浪の音の騒ぐ湊の、奥津城に妹が臥せる、遠き代に

有りける事を、昨日しも見けむが如も、念ほゆるかも

反歌

一八〇八 勝鹿の眞間の井見れば立平し水汲ましけむ手兒名し念ほゆ

菟原處女が墓を見て詠める歌一首并短歌

一八〇九 葦屋の菟原處女の、八年兒の片生の時よ、振分髪に髮總結くまでに、並び居る家にも見え

ず、虚木綿の隠りて座せば、見てしかと悞憤む時の、垣穂なす人の誂ふ時、血沼壯士、菟
原壯士の、廬屋燎き進し競ひ、相結婚しける時に、焼大刀の柄押燃り、白檀弓鞞取負ひて、
水に入り火にも入らむと、立向ひ競へる時に、吾妹子が母に語らく、倭文手纏踐しき吾が
故、大夫の争ふ見れば、生けりとも逢ふべくあらめや、矢串呂黄泉に待たむと、隠沼の下
延へ置きて、打嘆き妹が去ければ、血沼壯士其夜夢に見、取り續き追ひ行きければ、後れ
たる菟原壯士い、天仰ぎ叫び哭び、地に伏し牙喫み建怒びて、同輩男に負けてはあらじと、
懸き佩きの小劔取り佩き、冬薯蕷葛尋ね行ければ、親族共い行き集ひ、永き代に標に爲む
と、遠き代に語り繼がむと、處女墓中に造り置き、壯士墓此方彼方に、造り置ける故縁聞
きて、知らねども新喪の如も、哭泣きつるかも

反歌

一八〇 葦屋あしのやの菟原うさひ處女をとめの奥津城おくつぎを往來ゆきくと見れば哭なのみし泣なかゆ
 一八一 墓はかの上への木この枝え靡なびけり聞きし如血ごとく沼壯士ぬせとこにし依よりにけらしも

右の五首は高橋連蟲麻呂の歌集中に出づ、

卷 九 終

卷 十

春雜歌

雜 歌

- 一八三 久方ひさかたの天あめの香具山かぐやま此夕このゆふべ霞棚あせのぼり引く春立はるたてつらしも
- 一八三 卷向まきむきの檜原ひのに立てる春霞あせ大凡おほにし思おもはゞ艱難なづみ來こめやも
- 一八四 古いにしへの人の植いえけむ杉すぎが枝えだに霞棚あせのぼり引く春はるは來こぬらし
- 一八五 子等こらが手てを卷向山まきむきに春來はるれば木この葉は凌しのぎて霞棚あせのぼり引く
- 一八六 玉蜻たませみの夕ゆふさり來これば獵人さつひとの弓月ゆづきが嶽たけに霞棚あせのぼり引く
- 一八七 今朝けさ行いきて明日あすは來こむ云いふ愛はしきやし且妻山あまづまやまに霞棚あせのぼり引く
- 一八八 子等こらが名なに懸かけの宜よろしき朝妻あまづまの片山岸かたやまぎしに霞棚あせのぼり引く

右の七首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

詠 鳥

一八八 白雪しらゆきの降ふり敷しく冬ふゆは過すぎにけらしも、春霞棚あせのぼり引く野邊のべの鶯うぐいす鳴なきぬ歌

歌頭

- 一八九 打靡く春立ちぬらし吾が門の柳の梢に鶯鳴きつ
- 一八〇 梅の花咲ける岡邊に家居れば乏しくもあらぬ鶯の聲
- 一八一 春霞流るゝ並に青柳の枝啄ひ持ちて鶯鳴くも
- 一八二 吾が背子をな巨勢の山の喚子鳥君喚び返せ夜の更けぬとに
- 一八三 朝戸出に來鳴く貌鳥汝だにも君に戀ふれや時終へず鳴く
- 一八四 冬隠り春到り來らし足引の山にも野にも鶯鳴くも
- 一八五 紫草の根延ふ横野の春野には君を懸けつゝ鶯鳴くも
- 一八六 春來れば妻を求むと鶯の木末を傳ひ鳴きつゝもとな
- 一八七 春日なる羽易の山よ佐保の内へ鳴き行くなるは誰喚子鳥
- 一八八 答へぬにな喚び響めそ喚子鳥佐保の山邊を上り下りに
- 一八九 梓弓春山近く家居らし繼ぎて聞くらむ鶯の聲
- 一九〇 打靡く春さり來れば篠の群に尾羽打振りて鶯鳴くも
- 一九一 朝霧にしぬゝに沾れて喚子鳥三船の山よ鳴き渡る見ゆ

詠雪

一八三 打靡く春さり來れば乍然に天雲霧らひ雪は降りつゝ

- 一八三 梅の花降り蔽ふ雪を裏み持ち君に見せむと取れば消につゝ
 - 一八四 梅の花咲き散り過ぎぬ乍然に白雪庭に降り重りつゝ
 - 一八五 今更に雪降らめやも蜻火の燃ゆる春邊となりしものを
 - 一八六 風交り雪は降りつゝ乍然に霞棚引き春來りにけり
 - 一八七 山の際に鶯鳴きて打靡く春と思へど雪降り重きぬ
 - 一八八 峯の上に降り置ける雪の風の共此處に散るらし春にはあれども
- 右の一首は筑波山の作、
- 一八九 君が爲め山田の澤に井摘むと雪解の水に裳の裾沾れぬ
 - 一八〇 梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽白妙に沫雪ぞ降る
 - 一八一 山高み降り來る雪を梅の花散りかも來ると思ひつるかも
 - 一八二 雪を除きて梅をな戀ひそ足引の山片附きて家居らす君

右の二首は問答

詠霞

- 一八三 昨日こそ年は果てしか春霞春日の山に最早立ちにけり
- 一八四 冬過ぎて春來るらし朝日さす春日の山に霞たなびく

一八四五 鶯の春になるらし春日山霞棚引く夜目に見れども

詠柳

一八四六 霜枯れし冬の柳は宮人の藪にすべく萌えにけるかも

一八四七 浅緑染め掛けたりと見るまでに春の楊は萌えにけるかも

一八四八 山の間には雪は降りつゝしかすがにこの河楊は萌えにけるかも

一八四九 山の間は雪は消ざるを激ち合ふ川の柳は萌えにけるかも

一八五〇 毎朝吾が見る柳鶯の來居て鳴くべき茂に早なれ

一八五一 青柳の絲の麗しさ春風に亂れぬい間に見せむ子もがも

一八五二 百磯城の大宮人の藪ける垂柳は見れど飽かぬかも

一八五三 梅の花取り持ち見れば吾が宿の柳の眉し思ほゆるかも

詠花

一八七 春日なる三笠の山に月も出でぬかも、佐紀山に咲ける櫻の花の見ゆべく旋頭歌

一八四四 鶯の木傳ふ梅の移るへば櫻の花の時片設けぬ

一八五五 櫻花時は過ぎぬと見る人の戀の盛時と今し散るらむ

一八五六 我が挿頭る柳の絲を吹亂る風にか妹家が梅の散るらむ

一八七〇 毎年としのに梅は咲けども空蟬うつせみの世の人吾われし春なかりけり

一八六一 うつたへに鳥は喫はまねど標繩しのは延へて守らまく欲しき梅の花かも

一八六二 おし並べて高き山邊を白妙しろたへに匂はせたるは櫻花かも

一八六三 花咲きて實は成らねども長き月日に思ほゆるかも山吹の花

一八六四 能登川の水底さへに照るまでに三笠の山は咲きにけるかも

一八六五 雪見れば未だ冬なり乍然しかすがに春霞立ち梅は散りつゝ

一八六六 去年咲きし馬酔木あしび今咲く徒いたづらに地にや散らむ見る人なしに

一八六七 足引の山間照らす櫻花此春雨に散りにけるかも

一八六八 打磨く春さり來らし山の際の遠き木末の咲き行く見れば

一八六九 春雉鳴く高圓の邊に櫻花散りて流らふ見む人もがも

一八七〇 佐保山の櫻の花は今日もかも散り亂るらむ見る人なしに

一八七一 河蝦鳴く吉野の川の瀧の上の馬酔木あしびの花は地に置くな勤ゆめ

一八七二 春雨に争ひかねて吾が宿の櫻の花は咲初めにけり

一八七三 春雨は甚いたくな降りそ櫻花未だ見なくに散らまく惜しも

一八七四 春來れば散らまく惜しき櫻花少時は咲かず含みてもがも

一八七二 見渡せば春日の野邊に霞立ち開き匂へるは櫻花かも
一八七三 何時しかも此夜の明けむ鶯の木傳ひ散らす梅の花見む

詠月

一八七四 春霞棚引く今日の夕月夜清く照るらむ高圓の野に
一八七五 春來れば木陰多き夕月夜覺東なしも山陰にして
一八七六 朝霞春日の晚れば木の間より移ろふ月を何時とか待たむ

詠雨

一八七七 春の雨にありけるものを立隠り妹が家路に此日暮らしつ

詠河

一八七八 今行きて聞くものにもが明日香川春雨降りて激つ瀬の音を

詠煙

一八七九 春日野に煙たつ見ゆ少女等し春野の菟芽子摘みて煮らしも

野遊

一八八〇 春日野の浅茅が上に思ふ達遊ぶ此日の忘らえめやも
一八八一 春霞立つ春日野を往き還り吾は相見む彌毎年に

一八八二 春の野に心遣らむと思ふ達來し今日の日は暮れずもあらぬか

一八八三 百磯城の大宮人は暇あれや梅を挿頭してこゝに集へる

歎舊

一八八四 冬過ぎて春し來れば年月は改れども人は舊りゆく
一八八五 物皆は新しき良し唯人は舊りぬるのみぞ宜しかるべき

權逢

一八八六 住吉の里行きしかば春花の彌賞愛しき君に逢へるかも

譬喩歌

一八八九 吾が宿の毛桃の下に月夜さし下心苦しもうたて此頃

春相聞

相聞

一八九〇 春日野に鳴く鶯の鳴き別れ歸ります間も思ほせ吾を
一九一 冬隠り春咲く花を手折り持ち千度の限り戀ひ渡るかも
一九二 春山の霧に惑へる鶯も我に益りて物思はめや

- 一八九三 出で、見る向ひの岡に本繁く咲ける毛桃の成らずは止まじ
 一八九四 霞立つ長き春日を戀ひ暮らし夜の更け行きて妹に逢へるかも
 一八九五 春されば先づ三枝の幸くあらば後にも逢はむな戀ひそ吾妹
 一八九六 春來れば垂る柳の撓々にも妹が心に乘りにけるかも

右の七首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

寄レ鳥

- 一八九七 春來れば百舌鳥の草潜見えすとも吾は見遣らむ君が邊は
 一八九八 容鳥の間無く數鳴く春の野の草根の繁き戀もするかも

寄レ花

- 一八九九 春來れば卯の花腐し吾が越えし妹が垣間は荒れにけるかも
 一九〇〇 梅の花咲き散る園に吾行かむ君が使を片待ちがてり
 一九〇一 藤浪の咲ける春野に蔓ふ葛の下よし戀ひば久しくもあらむ
 一九〇二 春の野に霞棚引き咲く花の如是なるまでに逢はぬ君かも
 一九〇三 吾が背子に吾が戀ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛なり
 一九〇四 梅の花垂柳に折り雜へ神に手向けば君に逢はむかも

一九〇五 女郎花咲野に生ふる白躑躅知らぬ事以ち言はれし吾背

一九〇六 梅の花吾は散らさじ青丹よし平城なる人の來つゝ見るがね

一九〇七 如是ならば如何で植ゑけむ山吹の止む時もなく戀ふらく念へば

寄レ霜

一九〇八 春されば水草の上に置く霜の消つゝも我は戀ひわたるかも

寄レ霞

- 一九〇九 春山に霞棚引き鬱しく妹を相見て後戀ひむかも
 一九一〇 春霞立ちにし日より今日までに吾が戀ひ止まず片思にして
 一九一一 さ丹づらふ妹を思ふと霞立つ春日も晩れに戀ひわたるかも
 一九一二 靈寸春吾山の上に立つ霞立つとも座とも君が隨意に
 一九一三 見渡せば春日の野邊に立つ霞見まくの欲しき君が容儀か
 一九一四 戀ひつゝも今日は暮しつ霞立つ明日の春日を如何で暮さむ

寄レ雨

- 一九一五 吾妹子に戀ひて術なみ春雨の降る差別不知に出で、來しかも
 一九一六 今更に吾はい往かじ春雨の心を人の知らざらなくに

一九七 春雨に衣は甚く通らめや七日し降らば七夜來じとや
一九八 梅の花散らす春雨頻て降る旅にや君が慮せるらむ

寄草

一九九 國栖等が春菜摘むらむ司馬の野の數々君を思ふ此頃
二〇〇 春草の繁き吾が戀大海の邊による浪の千重に積りぬ
二〇一 不明しく君を相見て菅の根の長き春日を戀ひわたるかも

寄松

二〇二 梅の花咲きて散りなば吾妹子を來むか來じかと吾が松の木ぞ

寄雲

二〇三 白檀弓今春山に行く雲の行きや別れむ戀しきものを

贈レ葛

二〇四 丈夫の伏居嘆きて造りたる垂柳ぞ鬢け吾妹

悲別

二〇五 朝戸出の君が容儀を委曲く見すて長き春日を戀ひや暮さむ

問答

一九六 春山の馬酔木の花の悪しからぬ君には縦糸や寄せぬとも縦し

一九七 石の上布留の神杉神さびて吾や今又更戀に逢ひにける

一九八 狭野方は實に成らずとも花のみも開きて見えこそ戀の慰に

一九九 狭野方は實になりにしを今更に春雨降りて花咲かめやも

二〇〇 梓弓引津の邊なる莫告藻が花咲くまでに逢はぬ君かも

二〇一 川上のいつ藻の花の何時もく來ませ吾が背子非時けめやも

二〇二 春雨の止まず降るく吾が戀ふる人の容儀すらを相見せなくに

二〇三 吾妹子に戀ひつゝ居れば春雨の彼も知る如止まず降りつゝ

二〇四 相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮らさむ

或本の歌

二〇五 相念はずあるらむ兒ゆる玉の緒の長き春日を念ひ暮さむ

二〇六 春來れば先づ鳴く鳥の鶯の言先立てし君をし待たむ

夏雑歌

詠レ鳥

一九三七 丈夫の出で立ち向ふ、故郷の神名備山に、明け来れば柘の小枝に、夕されば小松が木末に、里人の聞き戀ふるまで、山彦の相響むまで、霍公鳥妻戀ひすらし、さ夜中に鳴く

反歌

一九三六 旅にして妻戀すらし霍公鳥神名備山にさ夜更けて鳴く

右の二首は古歌集中に出づ、

- 一九三九 霍公鳥汝が初聲は花にもが五月の珠に交へて貫かむ
 一九四〇 朝霞棚引く野邊に足引の山霍公鳥何時か來鳴かむ
 一九四一 朝霞八重山越えて喚子鳥呼びや汝が來る宿もあらなくに
 一九四二 霍公鳥鳴く聲聞くや卵の花の咲散る岡に葛引く少女
 一九四三 月夜好み鳴く霍公鳥見が欲れば今草取れり見む人もがも
 一九四四 藤浪の散らまく惜しみ霍公鳥今城の岳を鳴きて越ゆなり
 一九四五 朝霞八重山越えて霍公鳥卵の花邊から鳴きて越ゆなり
 一九四六 木高くは曾て木植ゑじ霍公鳥來鳴き響めて戀ひ益らしむ
 一九四七 逢ひ難き君に逢へる夜霍公鳥他時よは今こそ鳴かめ
 一九四八 木の晩の暮闇なるに霍公鳥何處を家と鳴きわたるらむ

- 一九四九 霍公鳥今朝の朝明に鳴きつるは君聞きけむか朝寝か寐けむ
 一九五〇 霍公鳥花橋の枝に居て鳴き響もせば花は散りつゝ
 一九五一 慨き哉醜霍公鳥今こそは聲の嘆るがに來鳴き響まめ
 一九五二 今夜の覺束なきに霍公鳥鳴くなる聲の音の遙けさ
 一九五三 五月山卵の花月夜霍公鳥聞けども飽かず又鳴かぬかも
 一九五四 霍公鳥來居も鳴かぬか吾が宿の花橋の地に散るも見む
 一九五五 霍公鳥厭ふ時なし菖蒲草臺にせむ日此處よ鳴きわたれ
 一九五六 大和には啼きてか來らむ霍公鳥汝が鳴く毎に亡き人思ほゆ
 一九五七 卵の花の散らまく惜しみ霍公鳥野に出入來鳴き響もす
 一九五八 橋の林を植ゑむ霍公鳥常に冬まで住みわたる爲
 一九五九 雨霽れし雲に副ひて霍公鳥春日を指して此よ鳴き渡る
 一九六〇 物思ふと寝ねぬ朝明に霍公鳥鳴きてさ渡る術なきまでに
 一九六一 吾が衣君に着せよと霍公鳥吾を領き袖に來居つゝ
 一九六二 本つ人霍公鳥をや珍しく今や汝が來し戀ひつゝ居れば
 一九六三 如是ばかり雨の降らくに霍公鳥卵の花山に猶か鳴くらむ

詠蟬

一九六四 默然もあらむ時も鳴かなむ 蟬の物念ふ時に鳴きつゝもとな

詠榛

一九六五 思ふ兒が衣摺らむに匂ひこそ鳥の榛原秋立たずとも

詠花

一九六六 風に散る花橋を袖に受けて君が御爲めと思ひつるかも

一九六七 馥しき花橋を玉に貫き送せむ妹は病羸れてもあるか

一九六八 霍公鳥來鳴き響もす橋の花散る庭を見む人や誰れ

一九六九 吾が宿の花橋は散りにけり悔しき時に逢へる君かも

一九七〇 見渡せば向ひの野邊の石竹の散らまく惜しも雨な降りそね

一九七一 雨間開けて國見もせむを故郷の花橋は散りにけむかも

一九七二 野邊見れば瞿麥の花咲きにけり吾が待つ秋は近づくらしも

一九七三 吾妹子に棟の花は散り過ぎす今咲ける如ありこそぬかも

一九七四 春日野の藤は散りにき何をかも御狩の人の折りて挿頭さむ

一九七五 時ならず玉をぞ貫ける卵の花の五月を待たば久しかるべみ

問答

一九七六 卵の花の咲き散る岳よ霍公鳥鳴きてさ渡る君は聞きつや

一九七七 聞きつやと君が問はせる霍公鳥しぬゝに沾れて此處よ鳴き渡る

譬喩歌

一九七八 橋の花散る里に通ひなば山霍公鳥響もさむかも

夏相聞

寄レ鳥

一九七九 春されば蝶羸なす野の霍公鳥 殆妹に逢はず來にけり

一九八〇 五月山花橋に霍公鳥隠らふ時に逢へる君かも

一九八一 霍公鳥來鳴く五月の短夜も一人し宿れば明しかねつも

寄レ蟬

一九八二 蟬は定時と鳴けども物戀ふる手弱女我は時別かず泣く

寄レ草

一九八三 人言は夏野の草の繁くとも妹と吾とし携はり宿ば

一九四 此頃の戀の繁けく夏草の刈り掃へども生ひ繁く如し
 一九五 眞葛延ふ夏野の繁く如是戀ひば實我が命常ならめやも
 一九六 吾のみや如是戀ひすらむ杜若丹づらふ妹は如何にかあらむ

寄花

一九七 片搓に絲をぞ吾が搓る吾が背子が花橋を貫かむと思ひて
 一九八 鶯の通ふ垣根の卵の花の厭き事あれや君が來まさぬ
 一九九 卵の花の咲くとはなしにある人に戀ひや渡らむ片思にして
 一九〇 吾こそは憎くもあらめ吾が宿の花橋を見には來じとや
 一九一 霍公鳥來鳴き響もす岡邊なる藤浪見には君は來じとや
 一九二 隠りのみ戀ふれば苦し翟麥の花に咲き出よ毎朝見む
 一九三 外のみに見つゝを戀ひむ紅の末摘花の色に出ですとも

寄露

一九四 夏草の露分衣著せなくに我が衣手の干る時もなき

寄日

一九五 六月の地さへ割けて照る日にも吾が袖乾めや君に逢はずして

秋雜歌

七夕

一九九六 天漢水底さへに照る舟泊てし舟人妹と見えきや
 一九九七 久方の天の川原に鶉鳥の裏歎ましつ羨しきまでに
 一九九八 吾が戀を妻は知れるを行く船の過ぎて來べしや事も告げなく
 一九九九 朱らびく敷妙の兒を屢見れば人妻故に吾戀ひぬべし
 二〇〇〇 天の川安の波に船浮けて吾が立ち待つと妹に告げこそ
 二〇〇一 蒼天よ通ふ吾すら汝が故に天の川路を艱難みてぞ來し
 二〇〇二 八千戈の神の御世より乏し妻人知りにけり繼ぎてし思へば
 二〇〇三 吾が戀ふる丹のほの面今夜かも天の川原に石枕纏かむ
 二〇〇四 己が夫乏しむ兒等は泊てむ津の荒磯枕きて寐君待ちがてに
 二〇〇五 天地と別れし時よ己が妻然ぞ手に在る秋待つ吾は
 二〇〇六 彦星は嘆かす妻に事だにも告げにぞ來つる見れば苦しみ
 二〇〇七 久方の天つ印と水無川隔てゝ置きし神代し恨めし

- 二〇〇八 黒玉の夜霧隠りて遠くとも妹が傳言早く告げこそ
- 二〇〇九 汝が戀ふる妹の命は飽くまでに袖振る見えつ雲隠るまで
- 二〇一〇 夕星の通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人壯子
- 二〇一一 天の川に向ひ立ちて戀ひむよは言だに告げむ妻寄すまでは
- 二〇一二 白玉の五百つ集を解きも見ず吾は在りがたぬ逢はむ日待つに
- 二〇一三 天の川水隠草の秋風に靡かふ見れば時來るらし
- 二〇一四 吾が待ちし秋萩咲きぬ今だにも染ひに行かな遠方人に
- 二〇一五 吾が背子に下戀ひ居れば天の河夜船擗ぎ響む楫の音聞ゆ
- 二〇一六 ま日長く戀ふる心よ秋風に妹が音聞ゆ紐解き設けな
- 二〇一七 戀しくは月日長きものを今だにも乏しむべしや逢ふべき夜だに
- 二〇一八 天の川去年の渡出遷易へば河瀬を踏むに夜ぞ更けにける
- 二〇一九 古よ擧げてし機を顧みず天の河津に年ぞ經にける
- 二〇二〇 天の河夜船の擗ぎて明けぬとも逢はむと思ふ夜袖交へすあらめや
- 二〇二一 遠妻と手枕交し寐たる夜は雞が音な鳴き明けば明くとも
- 二〇二二 相見まく飽足らねども稻の群の明け行きにけり船出せむ妹

- 二〇二三 さ寐初めて幾何もあらねば白妙の帯乞ふべしや戀も盡きねば
 - 二〇二四 萬世に携はり居て相見とも思ひ過ぐべき戀ならなくに
 - 二〇二五 萬世に照るべき月も雲隠り苦しきものぞ逢はむと思へど
 - 二〇二六 白雲の五百重隠りて遠けども夜去らず見む妹が邊は
 - 二〇二七 吾が爲と織女の其宿に織れる白布縫ひてけむかも
 - 二〇二八 君に逢はず久しき時よ織る機の白布衣垢つくまでに
 - 二〇二九 天の河楫の音聞ゆ彦星と織女と今夜逢ふらしも
 - 二〇三〇 秋されば河霧立てる天の川河に向き居て戀ふる夜ぞ多き
 - 二〇三一 縦ゑやし直ならずとも鷓鴣の裏嘆げ居ると告げむ見もがも
 - 二〇三二 一年に七夕のみ逢ふ人の戀も盡きねばさ夜ぞ明けにける
 - 二〇三三 天の河安の川原に定まりて神の集は禁む時なきを此歌一首、庚辰年作之
- 右の卅八首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、
- 二〇三四 棚機の五百機立て、織る布の和布衣誰か取り見む
 - 二〇三五 年において今か纏くらむ烏玉の夜霧隠りに遠妻の手を
 - 二〇三六 吾が待ちし秋は來りぬ妹と吾何事あれぞ紐解かざらむ

- 二〇三七 一年の戀今夜盡して明日よりは常の如くや吾が戀ひ居らむ
- 二〇三六 逢はなくは月日長きものを天の河隔てゝ又や吾が戀ひ居らむ
- 二〇三九 戀しけく月日長きものを逢ふべかる夕だに君が來まさるらむ
- 二〇四〇 牽牛と織女と今夜逢ふ天の河門に波立つな勤
- 二〇四二 秋風の吹き漂はす白雲は織女の天つ領巾かも
- 二〇四二 數々も相見ぬ君を天の河船出はや爲よ夜の更けぬ間
- 二〇四三 秋風の清けき夕天の河舟撈ぎ渡る月人壯子
- 二〇四四 天の河霧立ち渡り牽牛の楫の音聞ゆ夜の更け行けば
- 二〇四五 君が船今撈ぎ來らし天の河霧立ち渡る此川の瀬に
- 二〇四六 秋風に河浪立ちぬ暫くは八十の舟津に御舟停めよ
- 二〇四七 天の河川音清けし牽牛の早撈ぐ船の浪の動きか
- 二〇四八 天の河川門に立ちて吾が戀ひし君來ますなり紐解き待たむ
- 二〇四九 天の河川門に居りて年月を戀ひ來し君に今夜逢へるかも
- 二〇五〇 明日よりは吾が玉床を打拂ひ君と宿ねすて獨かも寐む
- 二〇五一 天の原指してや射ると白檀弓引きて隠せる月人壯子

- 二〇五二 此夕降り來る雨は彦星の早撈ぐ船の櫂の散水かも
- 二〇五三 天の河八十瀬霧らへり彦星の時待つ船は今し撈ぐらし
- 二〇五四 風吹きて河浪立ちぬ引船に渡りも來ませ夜の更けぬ間に
- 二〇五五 天の河遠き渡は無けれども君が船出は年にこそ待て
- 二〇五六 天の河打橋渡せ妹が家道止まず通はむ時待たずとも
- 二〇五七 月重ね吾が思ふ妹に逢へる夜は今し七夜を續ぎこそぬかも
- 二〇五八 年に艤ふ吾が船撈がむ天の河風は吹くとも浪たつな勤
- 二〇五九 天の河浪は立つとも吾が船はいざ撈ぎ出でむ夜の更けぬ間に
- 二〇六〇 唯だ今夜逢ひたる兒等に言問ひも未だせずしてさ夜ぞ明けにける
- 二〇六一 天の河白浪高し吾が戀ふる君が船出は今し爲らしも
- 二〇六二 機はたものの躑木ふみぎ持ち行き天の河打橋渡す君が來むため
- 二〇六三 天の河霧立ち上る棚機女の雲の衣の飄る袖かも
- 二〇六四 古いにしへに織りてし機を此夕衣ゆふべころもに縫ひて君待つ我を
- 二〇六五 足玉も手珠も玲瓏に織る機を君が御衣みけしに縫ひ堪へむかも
- 二〇六六 月日擇り逢ひてしあれば別れまく惜しかる君は明日さへもがも

- 二〇六 天の川渡瀬深み船浮けて携ぎ来る君が楫の音聞ゆ
- 二〇六 天の原振りさけ見れば天の川霧立ち渡る君は来ぬらし
- 二〇六九 天の河渡瀬毎に幣奉る心は君を幸く来ませと
- 二〇七〇 久方の天の河津に船浮けて君待つ夜等は明けずもあらぬか
- 二〇七一 天の河足沾れ渡り君が手も未だ纏かねば夜の更けぬらく
- 二〇七二 渡守船渡せをと呼ぶ聲の至らねばかも楫の聲せぬ
- 二〇七三 ま日長く河に向き立ちありし袖今夜纏かれむと思ふが樂さ
- 二〇七四 天の河渡瀬毎に思ひつゝ来しくも験し逢へらく思へば
- 二〇七五 人さへや見繼がすあらむ牽牛の妻よぶ船の近づき行くを
- 二〇七六 天の川瀬を早みかも烏玉の夜は更けにつゝ逢はぬ彦星
- 二〇七七 渡守舟はや渡せ一年に二度通ふ君ならなくに
- 二〇七八 玉葛絶えぬものからさ宿らくは年の渡に唯だ一夜のみ
- 二〇七九 戀ふる日は月日長きものを今夜だに乏しむべしや逢ふべきものを
- 二〇八〇 織女の今夜逢ひなば常の如明日を隔てゝ年は長けむ
- 二〇八一 天の川棚橋渡せ織女のい渡らさむに棚橋渡せ

- 二〇八二 天の河河門八十あり何處にか君が御船を吾が待ち居らむ
- 二〇八三 秋風の吹きにし日より天の河河瀬に出立ち待つと告げこそ
- 二〇八四 天の河去年の渡瀬絶えにけり君が来まさむ道の知らなく
- 二〇八五 天の河瀬々に白浪高けどもたゞ渡り来ぬ待たば苦しみ
- 二〇八六 牽牛の妻呼ぶ舟の引綱の絶えむと君を吾が念はなくに
- 二〇八七 渡守舟出して来む今夜のみ相見て後は逢はじものかも
- 二〇八八 吾が隠せる楫棹なくて渡守舟貸さめやも須臾はあり待て
- 二〇八九 乾坤の初の時よ、天の河に向ひ居りて、一年に二遍逢はぬ、妻戀に物念ふ人、天の河安の河原の、あり通ふ年の渡に、大船の艫にも舳にも、船艫ひ眞楫繁抜き、旗芒末葉もそよに、秋風の吹き来る夕に、天の河白浪凌ぎ、落ち激つ早瀬渡りて、稚草の妻を枕かむと、大船の思ひ憑みて、漕ぎ来らむ其夫の兒が、荒珠の年の緒長く、思ひ来し戀ひ盡すらむ、七月の七日の夕は、吾も悲しも

反歌

二〇九〇 高麗綿紐解き交はし天人の妻問ふ夕ぞ吾も偲ぼむ

二〇九一 彦星の川瀬を渡るさ小舟の得行き泊てむ河津し念ほゆ

二〇九二 天地と別れし時よ、久方の天つ驗と、定めてし天の河原に、新玉の月を重ねて、妹に逢ふ
時候ふと、立ち待つに吾が衣手に秋風の吹きし反れば、立ちて坐る手段を不知に、村肝の
心躊躇ひ、解き衣の思ひ亂れて、何時しかと吾が待つ今夜、此川の行く瀬の長く、在りこ
せぬかも

反歌

二〇九三 妹に逢ふ時片待つと久方の天の河原に月ぞ經にける

詠花

二〇九四 さ牡鹿のこゝろ相念ふ秋萩の時雨の降るに散らくし惜しも

二〇九五 夕されば野邊の秋萩末若み露に枯れつゝ秋待ち難し

右の二首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

二〇九六 眞葛原靡く秋風吹く毎に阿陀の大野の萩が花散る

二〇九七 雁がねの來鳴かむ日まで見つゝあらむ此萩原に雨な降りそね

二〇九八 奥山に住む云ふ鹿の初夜去らず妻問ふ萩の散らまく惜しも

二〇九九 白露の置かまく惜しみ秋萩を折りのみ折らむ置きや枯さむ

二一〇〇 秋田刈る假廬の宿り匂ふまで咲ける秋萩見れど飽かぬかも

二一〇一 吾が衣摺れるにはあらず高圓の野邊行きしかば萩の摺れるぞ

二一〇二 此夕秋風吹きぬ白露に争ふ萩の明日咲かむ見む

二一〇三 秋風は冷しくなりぬ馬並めていざ野に行かむ萩が花見に

二一〇四 朝顔は朝露負ひて咲くと云へど夕陰にこそ咲き益りけれ

二一〇五 春來れば霞隠りて見えざりし秋萩咲けり折りて挿頭さむ

二一〇六 沙額田の野邊の秋萩時しあれば今盛りなり折りて挿頭さむ

二一〇七 殊更に衣は摺らじ女郎花咲野の萩に染ひて居らむ

二一〇八 秋風は急く吹き來ぬ萩が花散らまく惜しみ競ひ立ち見む

二一〇九 我が宿の萩の若末長し秋風の吹きなむ時に咲かむと思ひて

二一一〇 人皆は萩を秋といふ縦し吾は尾花が末を秋とは云はむ

二一一一 玉梓の君が使の手折りける此秋萩は見れど飽かぬかも

二一一二 吾が宿に咲ける秋萩常しあらば我が待つ人に見せましもものを

二一一三 手もすまに植ゑしも著く出で見れば宿の早萩咲きにけるかも

- 二二四 吾が宿に植ゑ生したる秋萩を誰か標刺す吾に知らえず
- 二二五 手に取れば袖さへ匂ふ女郎花此白露に散らまく惜しも
- 二二六 白露に争ひかねて咲ける萩散らば惜しけむ雨な降りそね
- 二二七 少女等行相の早稲を刈る時に成りにけらしも萩が花咲く
- 二二八 朝霧の棚引く小野の萩が花今や散るらむ未だ飽かなくに
- 二二九 戀しくは形身にせむと吾が背子が植ゑし秋萩花咲きにけり
- 二三〇 秋萩に戀ひ盡さじと思へども縦ゑや惜し又逢はめやも
- 二二二 秋風は日に日に吹きぬ高圓の野邊の秋萩散らまく惜しも
- 二三三 丈夫の心はなしに秋萩の戀にのみやも苦惱みてありなむ
- 二三三 吾が待ちし秋は来りぬ然れども萩が花ぞも未だ咲かずける
- 二三四 見まく欲り吾が待ち戀ひし秋萩は枝も繁みに花咲きにけり
- 二三五 春日野の萩し散りなば朝東風の風に副ひて此處に散り來ね
- 二二六 秋萩は雁に逢はじと言へればか聲を聞きては花に散りぬる
- 二二七 秋來らば妹に見せむと植ゑし萩露霜負ひて散りにけるかも

詠雁

- 二二六 秋風に大和へ越ゆる雁がねは彌遠さかる雲隠りつゝ
- 二二九 明闇の朝霧隠り鳴きて行く雁は吾が戀ふ妹に告げこそ
- 二三〇 我が宿に鳴きし雁がね雲の上に今夜鳴くなり本國へかも行く
- 二三三 さ牡鹿の妻問ふ時に月を清み雁がね聞ゆ今し來らしも
- 二三三 天雲の外に雁がね聞きしよりはだれ霜降り寒し此夜は
- 二三三 秋の田を吾が刈場合の過ぎぬれば雁がね聞ゆ冬片設けて
- 二三四 葦邊なる萩の葉さやぎ秋風の吹き來るなべに雁鳴き渡る
- 二三五 押照る難波堀江の葦邊には雁宿たるらし霜の降らくに
- 二三六 秋風に山飛び越ゆる雁がねの聲遠さかる雲隠るらし
- 二三七 朝に行く雁の鳴く音は吾が如く物念へかも聲の悲しき
- 二三六 鶴がねの今朝鳴くなべに雁がねは何處指してか雲隠るらむ
- 二三九 野干玉の夜渡る雁は耐しく幾夜を経てか己が名を告る
- 二四〇 璞の年の經行けば誘ふと夜渡る吾を問ふ人や誰

詠鹿鳴

- 二二四 此頃の秋の朝明に霧隠り妻呼ぶ雄鹿の聲の亮けさ

- 二四二 さ牡鹿の妻呼立ふと鳴く聲の至らむ極靡け萩原
- 二四三 君に戀ひうらぶれ居れば敷の野の秋萩凌ぎさ牡鹿鳴くも
- 二四四 雁は來ぬ萩は散りぬとさ牡鹿の鳴くなる聲もうらぶれにけり
- 二四五 秋萩の戀も盡きねばさ牡鹿の聲い續ぎい續ぎ戀こそ益れ
- 二四六 山近く家や居るべきさ牡鹿の聲を聞きつゝ寝ねがてぬかも
- 二四七 山の邊にい行く獵夫は多かれど山にも野にもさ牡鹿鳴くも
- 二四八 足引の山より來せばさ牡鹿の妻呼ぶ聲を聞かましもものを
- 二四九 山邊には獵夫のねらひ恐れど小牡鹿鳴くなり妻の見を欲り
- 二五〇 秋萩の散りぬるを見て鬱しみ妻戀ひすらしさ牡鹿鳴くも
- 二五一 山遠き京にしあればさ牡鹿の妻呼ぶ聲は乏しくもあるか
- 二五二 秋萩の散りて過ぎなばさ牡鹿は侘び鳴きせむな見ねば乏しき
- 二五三 秋萩の咲きたる野邊はさ牡鹿を露を分けつゝ妻問ひしける
- 二五四 何故鹿の侘び鳴きすなる蓋くも秋野の萩や繁く散るらむ
- 二五五 秋萩の咲きたる野邊にさ牡鹿は散らまく惜しき鳴きぬるものを
- 二五六 足引の山の常陰に鳴く鹿の聲聞かすやも山田守らす兒

詠蟬

二五七 夕影に來鳴く蟬幾許も毎日に聞けど飽かぬ聲かも

詠蟋蟀

- 二五八 秋風の寒く吹くなべ吾が宿の淺茅がもとに蟋蟀鳴くも
- 二五九 影草の生ひたる宿の夕陰に鳴く蟋蟀は聞けど飽かぬかも
- 二六〇 庭草に村雨降りて蟋蟀の鳴く聲聞けば秋づきにけり

詠蝦

- 二六一 三吉野の石本去らず鳴く蝦うべも鳴きけり河を清けみ
- 二六二 神名火の山下響み行く水に蝦鳴くなり秋と云はむとや
- 二六三 草枕旅に物思ひ吾が聞けば夕片設けて鳴く蝦かも
- 二六四 瀬を早み落ち激ちたる白浪に蝦鳴くなり朝夕毎に
- 二六五 上つ瀬に蝦妻呼ぶ夕されば衣手寒み妻纏かむとか

詠鳥

- 二六六 妹が手を取石の池の浪の間よ鳥が音異に鳴く秋過ぎぬらし
- 二六七 秋の野の尾花が末に鳴く百舌鳥の聲聞くらむか片待つ吾妹

詠露

- 二六六 秋萩に置ける白露毎朝珠とぞ見ゆる置ける白露
 二六九 夕立の雨ふる毎に春日野の尾花が上の白露念ほゆ
 二七〇 秋萩の枝も撓に露霜置き寒くも時はなりにけるかも
 二七一 白露と秋の萩とは戀ひ亂り別く事難き吾が心かも
 二七二 吾が宿の尾花押靡へ置く露に手觸れ吾妹子散らまくも見む
 二七三 白露を取らば消ぬべしいざ兒等露に競ひて萩の遊びせむ
 二七四 秋田刈る假廬を造り吾が居れば衣手寒く露ぞ置きにける
 二七五 此頃の秋風寒し萩が花散らす白露置きにけらしも
 二七六 秋田刈る袖沾ちぬなり白露は置く穂田なしと告げに來ぬらし

詠山

- 二七七 春は萌え夏は緑に紅の緑色に見ゆる秋の山かも
 二七八 妻隠る矢野の神山露霜に染ひ初めたり散らまく惜しも
 二七九 朝露に染ひ初めたる秋山に時雨な降りそ在り渡るがね

詠黄葉

- 右の二首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、
 二八〇 九月の時雨の雨に沾れ通り春日の山は色づきにけり
 二八一 雁がねの寒き朝明の露ならし春日の山を黄葉たすものは
 二八二 此頃の曉露に吾が宿の萩の下葉は色づきにけり
 二八三 雁がねは今來鳴きぬ吾が待ちし黄葉はや繼げ待たば苦しも
 二八四 秋山をゆめ人懸くな忘れにし其黄葉の思ほゆらくに
 二八五 大坂が吾が越え來れば二上に黄葉流る時雨降りつゝ
 二八六 秋されば置く白露に吾が門の浅茅が末葉色づきにけり
 二八七 妹が袖卷向山の朝露に匂ふ黄葉の散らまく惜しも
 二八八 黄葉の匂は繁し然れども妻梨の木を手折り挿頭さむ
 二八九 露霜の寒き夕の秋風に黄葉ちにけりも妻梨の木は
 二九〇 吾が門の浅茅色づく吉隠の浪柴の野の黄葉散るらし
 二九一 雁がねを聞きつるなべに高圓の野の上の草ぞ色づきにける
 二九二 吾が背子が白布衣往き觸れば染ひぬべくも黄變づ山かも
 二九三 秋風の日ひに吹けば水莖の岡の木も葉も色づきにけり

- 二九四 雁がねの來鳴きしなべに唐衣龍田の山は黄ち初めたり
- 二九五 雁がねの聲聞くなべに明日よりは春日の山は黄ち初めなむ
- 二九六 時雨の雨間なくし降れば眞木の葉も争ひかねて色づきにけり
- 二九七 著く時雨の雨は降らなくに大城の山は色づきにけり
- 二九八 風吹けば黄葉散りつゝ少くも君松原の清からなくに
- 二九九 物念ふと隠るひ居りて今日見れば春日の山は色づきにけり
- 三〇〇 九月の白露負ひて足引の山の黄變ぢむ見まくしも良けむ
- 三〇一 妹許と馬に鞍置きて射駒山うち越え來れば紅葉散りつゝ
- 三〇二 黄葉する時になるらし月内の桂の枝の色づく見れば
- 三〇三 朝に日に霜は置くらし高圓の野山司の色づく見れば
- 三〇四 秋風の日に日に吹けば露繁み萩が下葉は色づきにけり
- 三〇五 秋萩の下葉赤ぢぬ荒玉の月の經ぬれば風を疾みかも
- 三〇六 眞十鏡南淵山は今日もかも白露置きて黄葉散るらむ
- 三〇七 吾が宿の浅茅色づく吉隠の夏身の上に時雨降るらし
- 三〇八 雁がねの寒く鳴きしよ水莖の岡の葛葉は色づきにけり

- 三〇九 秋萩の下葉の黄葉花に繼ぎ時過ぎ行かば後戀ひむかも
 - 三一〇 明日香川紅葉流る葛城の山の木の葉は今し散るらし
 - 三一一 妹が紐解くと結ぶと立田山今こそ黄葉始めたりけれ
 - 三一二 雁がねの鳴きにし日より春日なる三笠の山は色づきにけり
 - 三二三 此頃の曉露に吾が宿の秋の萩原色づきにけり
 - 三二四 夕されば雁が越え行く龍田山時雨に競ひ色づきにけり
 - 三二五 さ夜更けて時雨な降りそ秋萩の本葉の黄葉散らまく惜しも
 - 三二六 古郷の初黄葉を手折り持ちて今日ぞ吾が來し見ぬ人の爲
 - 三二七 君が家の黄葉早く散りにしは時雨の雨に沾れにけらしも
 - 三二八 一年に二度行かぬ秋山を心に飽かず過しつるかも
- 詠水田
- 三二九 足曳の山田耕作る兒秀ですとも標繩だに延へよ守ると知るがね
 - 三三〇 さ牡鹿の妻呼ぶ山の岳邊なる早稲田は刈らじ霜は降るとも
 - 三三一 我が門に守る田を見れば佐保の内の秋萩薄念ほゆるかも

詠河

二三三 夕さらす河蝦鳴くなる三輪河の清き瀬の音を聞かくし好しも

詠月

二三三 天の海に月の船浮け桂楫懸けて撈ぐ見ゆ月人壯子
 二三四 此夜等は小夜更けぬらし雁がねの聞ゆる空よ月立ち渡る
 二三五 吾が背子が挿頭の萩に置く露を清かに見よと月は照るらし
 二三六 心なき秋の月夜の物思ふと寐の寝らえぬに照りつゝもとな
 二三七 思はぬに時雨の雨は降りたれど天雲晴れて月夜清けし
 二三八 萩が花咲きの撓枝を見よとかも月夜の清き戀益らくに
 二三九 白露を玉になしたる九月の在明の月夜見れど飽かぬかも

詠風

二三〇 戀ひとつも稻葉搔き別け家居れば乏しくもあらぬ秋の夕風
 二三一 萩の花咲きたる野邊に 蟬の鳴くなる共に秋の風吹く
 二三二 秋山の木の葉も未だ紅葉ぢねば今朝吹く風は霜も置きぬべく
 詠茸
 二三三 高圓の此峯も狹に笠立てゝ盈ち盛りなる秋の香の良さ

詠雨

二三四 一日にも千重頻々に我が戀ふる妹が邊に時雨降る見ゆ
 右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、
 二三五 秋田刈る旅の廬に時雨降り我が袖沾れぬ干す人なしに
 二三六 玉櫛懸けぬ時なき吾が戀を時雨し降らば沾れつゝも行かむ
 二三七 黄葉を散らす時雨の降るなべに衾も寒し一人し宿れば
 詠霜
 二三八 天飛ぶや雁の翼の覆羽の何處漏りてか霜の降りけむ

秋相聞

相聞

二三九 秋山の紅葉が下に鳴く鳥の聲だに聞かば何か嘆かむ
 三四〇 誰ぞ彼と我をな問ひそ九月の露に沾れつゝ君待つ吾を
 三四一 秋の夜の霧たちわたり鬱しく夢にぞ見つる妹が形を
 三四二 秋の野の尾花が末の打靡き心は妹に依りにけるかも

三三三 秋山に霜降り覆ひ木の葉散り年は行くとも我忘れめや

右の五首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

依三水田一

三四 住吉の岸を田に墾り蒔きし稻秀で、刈るまで逢はぬ君かも

三三五 劔の後稻種蒔く田井に何時までか妹を相見ず家戀ひ居らむ

三四六 秋の田の穂の上に置ける白露の消ぬべく吾は念ほゆるかも

三四七 秋の田の穂向の依れる片縁に吾は物念ふつれなきものを

三四八 秋田刈る假廬を作り廬らしてあるらむ君を見む由もかも

三四九 鶴がねの聞ゆる田井に廬して吾旅なりと妹に告げこそ

三五〇 春霞棚引く田井に廬して秋田刈るまで思はしむらく

三五二 橋を守部の里の門田早稻刈る時過ぎぬ來じとすらしも

寄露

三三五 秋萩の咲き散る野邊の夕露に沾れつゝ來ませ夜は更けぬとも

三三五 色付かふ秋の露霜な降りそね妹が袂を纏かぬ今夜は

三五四 秋萩の上に置きたる白露の消かもしなまし戀ひつゝあらずは

三五五 吾が宿の秋萩の上に置く露の著くしも吾戀ひめやも

三五六 秋の穂を萎に打靡べ置く露の消かもしなまし戀ひつゝあらずは

三五七 露霜に衣手ぬれて今だにも妹許行かな夜は更けぬとも

三五八 秋萩の枝も撓に置く露の消かも死なまし戀ひつゝあらずは

三五九 秋萩の上に白露置く毎に見つゝぞ偲ぶ君が光儀を

寄風

三六〇 吾妹子は衣にあらなむ秋風の寒き此頃下に著ましを

三六一 泊瀬風かく吹く三更を何時までか衣片敷き吾が一人宿む

寄雨

三六二 秋萩を散らす長雨の降る頃は一人起き居て戀ふる夜ぞ多き

三六三 九月の時雨の雨の山霧の鬱陶き吾が胸誰を見れば息まむ

寄蟋蟀一

三六四 蟋蟀の吾が床の邊に鳴きつゝもとな、起き居つゝ君に戀ふるに寝ねがてなく旋頭

三六四 ころぎの待ち歡べる秋の夜を寐る驗なし枕と吾は

寄蝦

三六五 朝霞飼屋が下に鳴く蝦蟇だに聞かば吾戀ひめやも

寄雁

三六六 出でて去なば天飛ぶ雁の鳴きぬべみ今日今日と云ふに年ぞ經にける

寄鹿

三六七 さ牡鹿の朝伏す小野の草若み隠ろひかねて人に知らゆな

三六八 さ牡鹿の小野の草伏灼然吾が問はなくに人の知れらく

寄鶴

三六九 此夜の曉降ち鳴く鶴の思ひは過ぎず戀こそ益れ

寄草

三七一 はた薄穂には咲き出ぬ戀を吾がする、玉蜻の唯一目のみ見し人故に旋頭

三七〇 道の邊の尾花が下の思草今更々に何物か思はむ

寄花

三七二 草深み蟋蟀多集き鳴く宿の萩見に君は何時か來まさむ

三七三 秋づけば水草の花のあえぬがに思へど知らじ直に逢はざれば

三七四 何すとか君を厭はむ秋萩の其初花の歡しきものを

三七四 展轉び戀ひは死ぬとも灼然色には出でじ朝顔の花

三七五 言に出で、云はゞ忌々しみ朝顔の穂には咲きでぬ戀をするかも

三七六 雁がねの初聲聞きて咲き出たる宿の秋萩見に来吾が背子

三七七 さ牡鹿の入野の薄初尾花何時しか妹が袖枕かむ

三七八 戀ふる日の數長くしあれば御園生の辛藍の花の色に出にけり

三七九 吾が里に今咲く花の女郎花堪へぬ心に尙ほ戀ひにけり

三八〇 萩が花咲けるを見れば君に逢はず眞も久になりけるかも

三八一 朝露に咲きすさびたる鴨頭草の日斜くる共に消ぬべく思ほゆ

三八二 長き夜を君に戀ひつゝ生けらすは咲きて散りにし花ならましを

三八三 吾妹子に相坂山の幡薄穂には咲きでず戀ひわたるかも

三八四 いさゝめに今も見がほし秋萩のしなひてあらむ妹が光儀を

三八五 秋萩の花野の薄穂には出でず吾が戀ひ渡る隱妻はも

三八六 吾が宿に咲きし秋萩散り過ぎて實に成るまでに君に逢はぬかも

三八七 吾が宿の萩咲きにけり散らぬ間に早來て見ませ平城の里人

三八八 石橋の間々に生ひたる貌花の花にしありけり在りつゝ見れば

二二八九 藤原の古りにし郷の秋萩は咲きて散りにき君待ちかねて
 二二九〇 秋萩を散り過ぎぬべみ手折り持ち見れども不樂し君にしあらねば
 二二九一 朝咲き夕は消ぬる鴨頭草の消ぬべき戀も吾はするかも
 二二九二 秋津野の尾花苧り副へ秋萩の花を葺かさね君が假慮に
 二二九三 咲きぬとも知らずしあらば默然もあらむ此秋萩を見せつゝもとな

寄山

二二九四 秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしぞ思ふ

寄黄葉一

二二九五 我が宿の田葛葉日に日に色づきぬ來まさぬ君は何情ぞも
 二二九六 足引の山五味黄變づまで妹に逢はずや吾が戀ひ居らむ
 二二九七 黄葉の過ぎがてぬ兒を人妻と見つゝやあらむ戀しきものを

寄月

二二九八 君に戀ひ萎え憂侘ぶれ吾が居れば秋風吹きて月斜きぬ
 二二九九 秋の夜の月かも君は雲隠り須臾も見ねば幾許戀しき
 二三〇〇 九月の在明の月夜ありつゝも君が來まさば吾戀ひめやも

二三〇一 縦しゑやし戀ひじとすれど秋風の寒く吹く夜は君をしぞ念ふ
 二三〇二 里人し痛心なしと思ふらむ秋の長夜を寒くしあれば
 二三〇三 秋の夜を長しと言へど積りにし戀を盡せば短かりけり

寄夜

寄衣

二三〇四 秋都葉に染へる衣吾は著し君に奉らば夜も著むがね

問答

二三〇五 旅にすら紐解くものを事繁み丸寝吾がする長き此夜を
 二三〇六 時雨ふる曉月夜紐解かず戀ふらむ君と居らまじものを
 二三〇七 黄葉に置く白露の色にはも出でじと思ふに言の繁けく
 二三〇八 雨降れば激水つ山川石に觸り君が摧かむ心は持たじ

譬喩歌

二三〇九 祝部等が齋ふ社の黄葉も標繩越えて散る云ふものを

冬雑歌

雑歌

- 二三二 我が袖に霰たばしる巻き隠し消たすてあらむ妹が見むため
 二三三 足引の山かも高き巻向の岸の小松にみ雪降りけり
 二三四 巻向の檜原も未だ雲居ねば小松が木末ゆ沫雪流る
 二三五 足引の山道も知らず白樫の枝も撓に雪の降れゝば

右の四首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、但し件の一首、或本に云ふ、三方沙彌の作、

詠雪

- 二三六 奈良山の峯すら霧ふうべしこそ籬の下の雪は消すけれ
 二三七 如是降らば袖さへ沾れて通るべく降りなむ雪の空に消につゝ
 二三八 夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭も斑にみ雪降りたり
 二三九 夕されば衣手寒く高圓の山の木毎に雪ぞ降りける
 二三〇 吾が袖に降りつる雪も流れゆきて妹が袂にい行き觸れぬか
 三三一 沫雪は今日はな降りそ白妙の袖干さむ人もあらなくに

- 三三二 甚も降らぬ雪故許多も天の御空は曇らひにつゝ
 三三三 吾が背子を今かゝと出で見れば沫雪降り庭も斑に
 三三四 足引の山に白きは我が宿に昨日の暮降りし雪かも

詠花

- 三三五 誰が園の梅の花ぞも久方の清き月夜に許多散りくる
 三三六 梅の花先づ咲く枝を手折りてば裏と名づけて比へてむかも
 三三七 誰が園の梅にかありけむ許多も咲きにけるかも見が欲るまでに
 三三八 来て見べき人もあらなくに吾家なる梅の早花散りぬともよし
 三三九 雪さむみ咲きには咲かず梅の花縦し此頃はさてもあるがね

詠露

- 三三〇 妹が爲上枝の梅を手折るとは下枝の露に濡れにけるかも

詠黄葉

- 三三一 八田の野の浅茅色づく有乳山峰の沫雪寒く降るらし

詠月

- 三三二 さ夜更けば出で來む月を高山の峰の白雲隠すらむかも

冬相聞

相聞

二三三 降る雪の空に消ぬべく戀ふれども逢ふ由もなく月ぞ經にける
二三四 沫雪は千重に降り積け戀しくの月日長き我は見つゝ偲ばむ

右の二首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

寄露

二三五 咲き出たる梅の下枝に置く露の消ぬべく妹に戀ふる此頃

寄霜

二三六 甚も夜深けてな行き道の邊の五百小竹が上に霜のふる夜を

寄雪

二三七 小竹が葉に雪降り覆ひ消なばかも忘れむと云へば益して念ほゆ
二三八 霰降り甚も風吹き寒き夜や旗野に今夜吾が一人寐む
二三九 吉隠の野木に降り覆ふ白雪のいちじろしくも戀ひむ吾かも
三三〇 一目見し人に戀ふらく天霧らし降り来る雪の消ぬべく念ほゆ

卷 十 終

三三一 思ひ出づる時は術なみ豊國の木綿山雪の消ぬべく思ほゆ
三三二 夢の如君を相見て天霧し降り来る雪の消ぬべく思ほゆ
三三三 吾が背子が言愛しみ出でゝ行かば裳引著けむ雪な降りそね
三三四 梅の花それとも見えす降る雪の灼然けむな間使遣らば
三三五 天霧ひ降りたる雪の消なめども君に逢はむと生存へ渡る
三三六 窺狙ふ跡見山雪の灼然く戀ひば妹が名人知らむかも
三三七 海小船泊瀬の山に降る雪の月日長く戀ひし君が音ぞする
三三八 和射美の嶺行き過ぎて降る雪の重きて思ふと白せ其兒に
寄花
三三九 吾が宿に咲きたる梅を月夜好み夕々見せむ君をこそ待て
寄夜
三三〇 足引の山下風は吹かねども君なき夕は豫て寒しも

萬葉集上編終

昭和十年六月二十三日印刷
昭和十年六月二十七日發行

定價 金五拾錢
いふ本 萬葉集上

編輯者 三教書院編輯部

發行者 東京市中野區高根町六番地 鈴木種次郎

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地 精興社

發行所

東京市中野區高根町六番地 三教書院

營業所 電話 東京市中野區四丁目八〇番地 振替 東京市神田區錦町一丁目八〇番地 電話 東京市神田區錦町二丁目四〇番地

不許
複製

67
418

いてふ本刊行の辭

現今の讀書界が嘗ての諸外來思想偏重より翻つて、漸く自國の過去に於ける產物に對して新たに注目し始めた事は、當然の推移とは云へ喜ぶべき現象である。顧みて現時の我國出版界を見るに、日々發行される書物の如何に多いかは暫く措き、所謂實際に類するものが非常に多く、やゝ見るべきものは概して高價なる爲一般的でないか、或は豫約出版等により讀者の自由選擇を拒否するが如きものが多い。弊院は右の缺陷を除く意味より、此度多大の犠牲を覺悟して、内容・裝幀・價格の點に於ては、絶對に他の追従を許さざる『いてふ本』の刊行を企てた。蒐むるところ、古典といはず、輕文學といはず、雅といはず、俗といはず、韻文といはず、散文といはず、過去の日本が産める文藝作物の一切はもとより、必ずしも本邦を範圍とせず、漢籍中必讀のものを選み、必ずしも文藝を範圍とせず、經世修養其他の書を選び、廣く讀書界に提供し以て現下の缺陷を補はむとす。大方の御支持を期待して已まない所以である。

昭和十年五月

三教書院主

いてふ本書目

昭和十年
六月中葉のもの

古事記	全	武經七書	全
萬葉集	上下	唐詩選	全
枕草子	全	三體詩	全
平家物語	上中下	會我物語	上下
徒然草	全	雨月物語	全
神皇正統記	全	附世間猿諸道聽耳	全
附吉野拾遺	全	日蓮大士眞實傳	全
近松心中物	全	新編水滸畫傳	一
西鶴物	全	東海道中膝栗毛	上下
俳諧七部集	全	修紫田舎源氏	一二
蕪村七部集	全	釋迦八相倭文庫	一二
武將感狀記	全	いろは文庫	上下

和裝の表紙は始めに絲の綴目の處にしつかりと折り目を付けて下さい。さうすれば表紙に皺がよらず耐久力は殆ど永久的です。



終

